

---

# とある悪魔の天界追放

upる委員長

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある悪魔の天界追放

### 【Nコード】

N3340P

### 【作者名】

u p る委員長

### 【あらすじ】

大罪を犯した悪魔、その悪魔にチャンスを与えた神が下したのは下界で人間として過ごすことだった

（注…この物語はとある魔術の禁書目録シリーズですが、作者は内容をあまり知りませんので多少違うところもあります

## 第一話 天界追放（フォーリンダウン）（前書き）

どうもappleといいます

何か超電磁砲がかきたくなったので書きましたが・・・駄文です、はい

こんなだブンでよければぜひ呼んでみてください

不定期更新ですので、そのところお願いします、たぶん週一ペースだと思います

## 第一話 天界追放（フォーリンダウン）

私は悪魔だ

そして大罪を犯してしまった

故にそれ相応の罪を償わなければならない

今まさにそれが決められようとしている

『貴様は神でもないのに世界に干渉した、この罪はわかるか』

鎖や文字を書かれた札で拘束されている私は、  
かろうじて動く口だ  
けで短く返事をした

裁くものは一度眉間にしわを寄せて私を見た

ごみを見るような目でだ

周りにいる天使や悪魔の反応もそうだった

罪を犯したから当然というべきか、それとも唯単に自分より位が低いという偏見だろうか、その視線は見ただけで動物を殺せるような冷たい視線

だが私は悪魔、そんなものは流して私も裁くものを見つめる

瞳に力を入れて数秒見た後裁くものは冷や汗をかいて目を背けてしまった

『貴様の犯した罪は本来永遠に地獄に葬られるほどのものだ』

そう、私はそれほどの罪をしたのだ

世界に直接手を出し、運命を変えて、死なくていいものを殺して、未来を変えて、それから生まれる子孫も殺してしまったのだ

いわば私一人で、無限といえるほどの人間、いや動物を殺してしまった  
った

『だが』

私が感傷に浸っていると裁くものが口を開けた

『貴様は神に選ばれしものだ、一度だけチャンスを与えよう』

・・・私は・・・裁かれないのか？

なぜ？神ですら軽いとはいえ罪に問われるものなのだぞ？

それにチャンスを与えるだと？

答えは否、ありえるはずはない、だが確かに裁くものはチャンスを与えるといった

『貴様はある下界に堕ちて、人間として生きよ、貴様が神から認め  
た器と認識したら戻ってくるがいい』

下界に堕ちる・・・か、フフ、チャンスとは言ったものではない  
か、やはり私は裁かれるのだな

下界に堕ちて、天界に戻るはずも無いのにな・・・

だがいいだろう、私は人間として一生を過ごし、罪を償ってやろう  
ではないか

永久ともいえる、輪廻の中で

『貴様に拒否権は無い、では堕ちろ（・・・）』

裁くものは最後まで冷めた目で私を見下していた

周りに居るものも、薄ら笑いも浮かべ愚弄している

だが私は笑おう

「今まで、迷惑をかけたな——」

大勢のなかで唯一、悲しく顔を鎮めている友人の名前は言えぬまま、  
私は堕ちてしまった



最後までいい言わせてほしかったよ

## 第二話 置き去り（チャイルドエラー）

私は赤子という存在でこの世、下界に生まれた

無意識のうちに泣き出したのはなぜだろうか、と思っていたが、それを考えても答えは出せそうにない

それよりも、どうやらこの世界は私が干渉した世界ではない、環境も全く違うので平行世界といった類でもないだろう

一年や二年なんてあっという間だ、なにせ私は何千というほど生きてきたのだ

そして私が三歳になり、誕生日という祝いを人間はやっていた

人間が生まれた日にやるといわれている行事である

以外にも数々の祝い事があって私は多少驚いたが、そんな世界もあるのだろうという結果が出た

私にとって祝い事など騒がしいだけの行事だから正直、やってほしくは無いのだがな

でも人間の笑顔というものはいいな

見ているだけで私もつい笑ってしまう

私は悪魔、いや『元』悪魔だが喜びや楽しさなどの感情もちゃんとある

いやいや、そんなところではない、愛の神様と呼ばれる悪魔も居るらしいので悪魔は一丸に悪いやつとは言えない、それは私が保証しよう

それから、当然喜びもあれば――――

「ついで来い」

「・・・」

―――  
悲しみもある

私は五歳になったと同時に親から捨てられた

理由は簡単、金銭的余裕がなくなり、子供を売りとばしたのだ

この世界はこんなことは無いだろうと思っていたが検討ちがいだつたな

どんな世界でも人間は金として売られてしまう

私の行き先は未来都市、その中の住人の8割が学生ということで別名『学園都市』とも言われている、今の技術の何十年先といった都市である

きっと研究、しかも私は売られた身、人体実験など危険なことをされるかもしれない

親の反応もまるでこれが最後のようだったから命の危険性がある事

は容易にわかった

そこからすぐに、私は学園都市の研究施設に放り込まれた

その際、摩天楼のように並ぶ背景を見て、まるで別世界に飛ばされたような気がした

私はすでに別世界に居るというのに・・・フフまた別世界に飛ばされる・・・か、滑稽なものだ

ああ、私は捨てられたのか、私の両親に・・・唯一反対してくれたのは10こ上の兄だ

年齢は結構離れており、受験というもので忙しいとっていたが私の面倒を見てくれて優しく、頼りがいのある人格者だ

そんな家族との思い出を思い出したりしていた

だがそんなに思い浸る時間もなく、ついたとたん研究、実験の繰り返される毎日であった

まず最初に、たぶん売られてきたであろう私以外の4人の子供と一緒に『能力開発』と呼ばれるものを受けた

簡単に言うと、名のと通りの異能の力を開発するというものである

しかし必ずしも皆が能力を開花できるものではなかった、そして能力が無いもの、低いものはどこかの施設に送られてしまうのである

私はないことを祈った――――

——そしてそんな希望は叶った

「君にはどうやら能力が無いようだ・・・おい、この子を施設に送れ」

私は白衣を着た男性に手を引かれて車まで連れて行かれると、施設に送られた

まったく、移動で忙しい日々だ

後から聞いた話だ、どうやら私は置き去り（チャイルドエラー）と呼ばれる言わば捨て子のようなものだ

置き去りか、間違っただけでは無いだろうな、そういえば白衣の人物は私



を名前ではなく番号で呼んでいたな

此処では名前も呼べないのか・・・私にも人間として一応名前はあるのかな・・・

「ねえねえ、君も能力ないの？」

私と一緒に車に乗っていた子供が声を話しかけてきたな、ふむ、これこれ30分ものっているから暇なんだろうな

・・・何を考えているんだ私は、質問を問われたら一応返そう・・・  
・・・愛想良くしたほうがいいのか？

一応笑いながら返事をする、たぶん男の子であろう子供はそんなんだといった

そして外を向いてこちらには興味はなし・・・か

「ついたぞ、降りろ」

ずいぶんと乱暴な運転手だな、さっきの研究員のほうが優しそうに  
みえてくる、裏で何をやっているかは知らないがな

聖ジョージ・・・・・・・・どこかの天使で居たような名前だな

もう天界には縁は無いだろうから思い出すことは無いだろうがな

こうして私は二年、短いようで長い幼少生活を施設を転々として育  
った

なぜ二年か？

それは私が『悪魔』だからだよ・・・

### 第三話 出会い（エンカウンター）

「わたしはみこと、いっしょにあそばない？」

施設の隅っこで本を読んでいた私に、声をかけてきたのは無邪気そうな笑顔をした少女だ

私は幼少期を何事もなくすごそうと思い影を薄く、施設の隅に隠れていたのに

唯単に幼稚すぎるというのが本当の理由だが・・・

『残念、私は遊ばないよ、向こうの子供たちと遊んでおいで』

私は優しい口調でそういったのだが、この少女は言うことを聞かずさわいでいる

なぜ私に構うのだ・・・まったく、ありがた迷惑、というやつだな

「そんなに部屋の中にいたら、病気になっちゃうんだよ」

確かに病気にはなるな、何日も引きこもっていたらだがな・・・

残念ながら私は一日に少し散歩をしているから大丈夫だ

そういうと少女はさらに口調を強くしていったではないか・・・

・面倒くさいな

「いっいっかっらっあそぼっよ」

無理やり手を引かれて私は外に出されてしまった

太陽がまぶしい・・・そして暑い・・・

「なにする？なにするっ！」

せめて誘うなら、何をするのか決めておいてほしかったな・・・

さてと、しょうがないな、何千年ぶりに子供みたいにはしゃいでみようか・・・はしゃぎ方、忘れてなければだが・・・

「あゝそゝぼおゝ」

また今日も、ミコトは声をかけてきた

しぶしぶ外に出てあげたのはいいのだが・・・声をかけてきて一ヶ月たったが、誘うなら何をするか決めてほしかった

しょうがない、まえみたいにはしゃぎ過ぎないように適当に遊んでみようか

それにしても私は人間になじみすぎたな、全く違和感を感じない・・・

人間と過ごす上ではいいことなのだろうが、悪魔だったということ

が忘れられないから微妙な心境だな

「ふたねえ、ドロがっ顔にドロがっ！」

両手にドロを持ったミコトが声をかけてきた

いつの間にドロをもったんだ？！

というか、絶対にそのまま髪をさわっただろう……まったく、ミコトは馬鹿だな……

それとふたねえは止めてほしい……女じゃないし、せめて苗字の綾瀬と呼んでほしいものだ、それか名前

双葉と言う名前で、私という一人称をつかっているから女に良く間違われるのがたまにきづだがな

『手に泥をつけたまま髪を触るからだ、そんなことならとめておけ』

私は髪がかなり長く、ポニーテールという結び方をしている、天界に居る時は結ぶだけで不安定だったがうなじのほうとかをピンというものでとめると抜群に安定する

これは私も感心したな、ヘアピンよ、ほめてつかわそう

「ありがとう」

私はうなじのピンを一つははずしてミコトの髪をとめた

『それはミコトにあげよう』

うむ、最近新しいのも買ったしな、ちょうどいらなくなっただし、ピンも使われたほうがいいだろう

それにしても今日も暑い・・・涼しくならないものか・・・

こんなこと思っているなら、ミコトともっと遊んでおけばよかったと

私は明日、それを実感することになった

## 第四話 魔術（マジック）

「魔術が使える……」

私は自分の右手を凝視したあと、視線を元に戻して目の前の惨事を見た

薄暗い路地裏、それが半壊している

正確に言えば溶けていたり、凍っていたりしている

これは私がやったのか？

私は施設を出て、外の様子を調べるために散歩をしていた

最初、施設の人間は一人で外出は無理だといっていたが無理をいつて出てしまった

すまない、名も知らぬ人間よ

一応は謝罪をしよう

『それよりも、迷ってしまった』

あたり一面摩天楼のようなビルが並びつくす街だ、当然だろうな



に、しても子供の歩幅は狭すぎる、そして体力も無いならめまいがしてきたな

しょうがない、涼しそうな路地裏でしばし休むか

やはりずいぶん涼しいな・・・ふぁ・・・眠く・・・なって・・・きた・・・

「おやおーや、こんなところに子供が居るじゃねえか」

わざとらしい口調だな、こういうものは確か・・・うざいやつ、というのかな？

にしても2，3，4・・・6人も人間が集まって何のつもりだ？

「小さいけど、こいつは上物になるぜえ」

一番近い馬面の人間が私をつかんできた、髪をついかむでない、痛い・・・

最初の言葉でうすうす感づいたが・・・こいつら、スキルアウトという不良ではないのか？

それならばやばいな、私はこんな体では対抗手段が一つも無い

「ちよーと、それなら俺が味見でも、グフフ」

「さすがロリコン、手が早い……」

……こいつら私を女と感じがいしているではないのか？

それなら私が男といえいいな……よかった

『残念だが……私は男だ』

「ああ、関係ねえよ？」

汚い笑みだ……もしかして、私を襲うつもりなのか？

……フフ、これが罪とでも言うのか、神よ……

人間はいいものだと思うが……

だがな、こやつらみたいな下種な人間に倒される筋合いはないっ！

「つつ……逃げやがった、あっはっはっ子供が大人に勝てるわけねえだろ」

私は頭をつかんでいた人間の手首に手刀をうちこみ、一瞬の隙を突いて逃げ出した

だが相手は六人、しかも丁寧なことに入ってきた路地裏をふさぎこんでほかの場所からしか逃げれない

絶体絶命とはこのことだな

「っ！！」

少し入り組んだ路地裏はまるで迷路、そして体力はすぐになくなり、私は盛大にこけた

不良どもはすぐ後ろに、もうだめだな・・・

「あっはっはっは、鬼ごっこはもうおわりかー、じゃあ鬼さんはご褒美でももらおうかねー」

卑劣な笑みを浮かびながら一人の男は顔をちかづけてくる

背筋に嫌な悪寒を感じながら私は目を瞑った

こんな時、魔術がつかえたら・・・ん？

そういえばまだ、人間になって魔術は使ったことはないがもしかして・・・

どんな世界にも魔力は存在する、私はそれを知っている

私は手で男の顔を殴り、最後の抵抗をした

「いってえ、くそ、このガキがっ！」

今度はいとも簡単にきれてしまったな・・・まあよい、一瞬さえ時間ができれば魔術は使用できる

『きえろ』

私はつぶやいた

そして魔術は発動してしまった

その後、アンチスキルというものが来て私は保護された

発見したさいに事故現場を見られてはいけないと怪我した人間と、  
原形をとどめていない路地裏を魔術により再生して何事も無かった  
ようにしてみせた

「大丈夫だった？」

私はアンチスキルの一人につかまって事情徴収をされている

まずは私を犯そうと試みた下種共は何処に消えたか

『どこかに行った』

もちろん嘘だ、本当は私が遠くに飛ばしただけだ

「えーと、じゃあ君の家まで送るよ、おうちわかる？」

『私に家というものは無い、両親に捨てられたからな・置き去りだ』

そういうとアンチスキルの男は悲しそうな顔をして謝ってきた

置き去りは世間一般では差別されることもあるのに、この男は同情してきたな

この人間はさぞかし裕福な家庭で育ったのだろうな・・・

そうでなければ純粋に人を同情するなどありえないからな

なんて関心をしていると部屋に誰かが入ってきた

「すみません、この子施設から勝手に出てきたんですよ」

「あ、そうだったんですか、今度からは勝手に抜け出さないようにね」

む、施設の人間だったか・・・きつとミコトに心配かけただろうな

だがこの人間の顔、見覚えが無いな・・・

普段関心をもたないからな、新しく入ってきたものだろうか？

「それじゃあ、もう聞くことは終わりましたので、かえってもいいですよ」

「はい、ではすみませんでした」

ペコリとお辞儀をして部屋を出た私が見たものは

愛想笑いをやめ、冷めた目で見てくる先ほどの男性

こいつ、やはり施設の人間ではないな・・・

こんなところで魔術をへたに使えるはずもなく、私は車に乗せられて二年ぶりの研究所につれらされた

## 第五話 孤独（ロンリー）

どうやら私が魔術を使用して不良を倒したのを監視カメラでしまったようだ

学園都市中に監視カメラがあるとは予想だにしてなかったな

そして私は研究所で能力を調べられた

だが結果は無能力者、なにせ超能力ではなく魔術を使ったからな

A I M 拡散力動場というものが私には全く無いらしい

ここではじめて知ったのだが能力者の中ではランク付けがあるらしいな

無能力者 レベル0（六割方はこれに当てはまり、例外を除いて全く『無い』という訳ではないが、能力的には所謂おちこぼれ）

低能力者 レベル1（多くの生徒が属し、スプーンを曲げる程度の力）

異能力者 レベル2（レベル1と同じく日常ではあまり役には立たない）

強能力者 レベル3（日常では便利だと感じる程度、能力的にはエリート扱いされるレベル）

大能力者 レベル4（軍隊において戦術的価値を得られる程の力）

超能力者 レベル5（学園都市でも七人しかいない、一人で軍隊と対等に戦える程の力）

一人で軍隊か・・・まあ、私の魔術も世界的な干渉はできないから5ぐらいだろうか・・・偽るが・・・

そして私は無能力で最下位のLEVEL0、研究員の『大半』はここで私の能力の研究はあきらめたがだが少数残った研究員は私が無能力者という事実をしつても、さらに私の脳を研究した

多重能力がどうか言っていた研究員もいたが、どんなに調べても私から超能力者だという証拠はでてこなかった

そしてある事件をきっかけにこの研究は凍結した

研究のせいで脳に負荷をかけすぎて、私が脳に障害を負ったのだ

それでもなお、一人だけ私の脳に関心を持っている研究員がいたのだが、アンチスキルに拘束されて終わった

マッドサイエンティスト

主なことは成長ホルモンなど著しく低下し、体内で栄養素が作れなくなったことだ

だから私の見た目はよくて10歳前後にしか見えない

確かに、私の年齢と体があっていないような気がしたわけだ・・・

この研究の始めのほうからその症状が始まっていたのだが、気づいたのはつい最近だったからな



そして私はまたもや捨てられてひとりに、本当にひとり、何も頼れるものなどいなくなったしまった

一度目は天界から下界へ、二度目は親から売られて学園都市へ、三度目の墮落で本当の独りぼっち

ハハ、もう笑うしかないな・・・

幸い、住む場所と賠償金みたいので多額の金を用意してくれたので生きてはいけるが、私はもうすぐ15歳になる、学年というものは中学三年生だな

さて、学校というものにも興味があるから入ってみたいのだが・・・  
・どうすれば入れるのだろうか？

というわけでまず最初に困るものは金なので銀行という場所に金を下ろしに行かねばならないな

今は冬だからマフラーを巻いて出て行った

わりと寮のすぐ近くにあったので楽ができてよかった

『すみません、お金下ろしたいんだが』

にしてもすごい人・・・あんまし人ごみは好きじゃないんだけどな  
なんて考えていたら隣に居る男の様子が怪しい・・・む、何かしやうとしているな、顔に出すぎだ

まあ、此処は金がたくさんある場所というからな、たぶんそれ目当てだろう

「おい、お前らうごくなあー！」

・・・・騒ぐのいいが私を人質にするのはやめてほしいな

そして威嚇の狙撃がやけに耳に響いた・・・みみ痛い・・・

『こんなこと止めたほうがいい』

聞くはずも無いだろうが一応言っておこう、というかこのままじゃオマエ絶対につかまるぞ？

「く、人質風情が俺にくちだしすんじゃないっ！」

私は数メートルほど飛ばされた、殴られた口の中には血の独特な味が広がった

久々だな、拳で殴られるのは・・・にしてもこいつかなり動揺してるな、あれはすぐにつかまるぞ

「はあっ!!！」

私が飛ばされた後すぐに少女が走りよっていき、一瞬で男をたおしていた

・  
あんなに小さい少女でよく強盗に勝てたものだ・・・片方だがな・

「きゃああ！」

やはりあの男もぐる、一人だけ冷静すぎるんだよ

それにしても今度はナイフか、接近戦ではあちらのほうが有利、しかも人質に私の少し上くらいの少女もいるし

あの髪を結んだ少女は、どうするだろうか、見ものだ

とはいっても目の前で死なれては困るからその時は助けて上げなければな

『ジリリリリリリ』

シャッターもしまつて強盗は逃げる術なし、かな？

でもたぶん強盗は能力者だろうな、さっきの男みたいにあせりや同様が全く無い

・・おお、へんてこな機械が出てきたぞっ！

この世界には面白いものがたくさんあるな

だが強盗は変わらず冷静だな、むっ、強盗が何か出そうと――

『ボコオオン!!』

爆発、そして後ろに隠れて攻撃をはかった少女はその衝撃でぶっ飛ばされた————いや近くの学生がかばって直撃はまぬがれたその衝撃で女性はもろに受けてぶっ飛ばされてしまった

「おい」

強盗は声をかけ、髪を二つに結んだ少女が顔を上げると顔面を蹴った私は魔術をしようとして倒そうとも考えたが、ばれてもう一度あの研究施設に送られるのはごめんだ

冷静に考えるとすぐにアンチスキルという組織がくるだろう

だから私は少女の手助けを優先するより、倒れている女性の下に静かに寄っていった

『大丈夫か?』

反応が無い、脈はあるし気絶しているだけだな

でも頭から血が出ているな・・・出血多量にはならないだろうが少し危険だな・・・

まったく、これ以上私の目の前で『人を殺さないでくれよ』……つかいたくは無いが、しょうがない、魔術を使用するか

おっと、その前にカメラを壊さねばな、同じミスはおかさないようにしないと

私はパチンと指をならして銀行内のカメラをすべて破壊した

「チッ、まだいも、ぎゃあっ?!」

お前はもう黙れ、うるさい

私は魔術を使用して男の周りに火を出した

一瞬、いや刹那といえる時間で強盗は黒こげになってしまった

さて、騒がれてばれる前にどこかにいかねば、また研究所はごめんだからな

そういえばさっきの少女、足で蹴られた時、顔にひどい怪我があったな

私はこっそりと魔術を使用した、治癒の魔術の中でも高位の『逆流の魔術』を使用した

まるで何事も無かったようにしてあげたのだよ、時間を戻して

女は顔が命といていたしな、強盗捕獲に努力を免じてのことだ

それでは私は帰ろうか．．．．あ、シャッターしまつてたな

さて、転移の魔術でも使いたいのだが、それでは完璧にバレてしま  
うな

しょうがない、アンチスキルが来るまでまとうか．．

## 第六話 高等学校（ハイスクール）

今日は6月20日、私はとある高校に来ていた

はやく学校というところに行きたかったのだが私には身分や年齢、その他もろもろを証明するものが一つも無かったからこんな時期になっちゃった

だがなあ・・・小学生に間違われたのはこれで何回目だろうか、後、女にも・・・

もう人間としてのプライドもずたずただぞ・・・

「それじゃあ入ってきてくださーい」

なんだか教室のほう騒がしいな・・・まあ、楽しいのは嫌いじゃないからいいが

でもな、私が入った瞬間に黙るのは止めてほしいな・・・

『私は綾瀬双葉d「なに、あんこっ高校生なんっ!」・・・』

私の台詞をつぶすな、青髪ピアス野郎・・・

「みんな、静かに、それでも15歳なんですよ」

その台詞も正直傷つくぞ、『それでも』って、あなたも人の事いえないぞ小萌先生よ

「いや、新たな幼女キャラ登場かにや？」

その猫野郎もっ！私は男だぞっ！そして幼いのは見た目だけで精神年齢ならお前の何万倍だぞっ！

「おい、あいつ男だぞ・・・」

「・・・・・・え、」

『あ・・・当麻・・・』

「「ええー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！？」」

うるさいやつらだな

目が覚めたら知らない天井・・・当たり前か、昨日来たばかりだからな  
それにしても朝から騒ぐやつはだれだ、確か『不幸だー』とか言っ  
てたな

私の睡眠を邪魔して・・・私のほうが不幸だ

さて、まだまだ知らない事もあるし、交友関係を築こうか・・・

早速私は部屋の隣の住人に挨拶をしにきた



愛想よく、愛想よく、愛想よく……

私はできる限りの笑顔を作っていた

「はいはい……どちらさまで？」

『私は隣に引越してきた綾瀬双葉だ、これからよろしく』

引きつった笑顔になってないか？

私は意識的に笑うことができないからな……研究所では笑うことなど全く無かったし……

「あ、おお、よろしく、俺は上条当麻、気軽に当麻って呼んでくれ」

『それでは私も双葉と呼んでくれ、堅苦しいのは好きじゃない』

上条当麻、あの頭のつんつんはどうなっているのか……触ってみた  
ら本当に硬そうだな……

……何つまらないことを考えているんだ、私は……

『私はこの事をあまり知らない、だからわからない時は教えてくれ』

「ん、そのときは上条さんにおまかであれでせう」

ふふ、この人間おもしろそうだな……あ、今は自然に笑えたような  
気がする……

別れ際に言った一言は『私は一応男だぞ』だ、大変驚いた顔をしていたからきつと女と見ていたのだろう・・・何度も間違われて、そろそろなきそうだな・・・まあかないけど

当麻 side

「はいはい・・・どちらさまで？」

『私は隣に引っ越してきた綾瀬双葉だ、これからよろしく』

ドアを開けたら幼女が立っていた、かわいい系なんだが凜とした声と口調からか綺麗なお姉さんみたいな雰囲気

将来は美人さんになりそうだな・・・はっ、俺は何考えてんだあ

そんな事より自己紹介されたら返さないとな

「ああ、よろしく、俺は上条当麻、気軽に当麻って呼んでくれ」

『それでは私も双葉と呼んでくれ、堅苦しいのは好きじゃない』

かわいい・・・いやいや、上条さんは決してロリコンじゃありませんよっ！

『私はこの事をあまり知らない、だからわからない時は教えてくれ』

「お・・・あ、そのときは上条さんにおまかせあれでせう」

こんな幼女に顔を赤くした俺はダメなのか orz

『一応私は男だぞ』

双葉は別れ際に言ってきた言葉・・・って、ええっ!?!?!?

なんだその幻想・・・はっ幻想ならこの幻想殺しでっ！

かなりあせっていた俺の心中・・・

「上やんは幼女をとられたくなくて嘘言ってるにゃ」

「なんや、そうやったんか」

「ちょ、上条さんは嘘ついてませんよっ!?!」

『お前ら、私は男だぞ、何なら確認してみるか?』

たいていのやつは此処で観念するはずだ、なぜなら触っても男なら・・・ああ、何処をとは言わないがな

変な目で見られるのは当然だからな

たいていのやつなら・・・な

「よっしゃ、いってやろか」

・・・は？、あのエセ関西青髪ピアス野郎はなんと言った？

「さてと、何処を触ろうか」

と手を伸ばした先は私の胸で・・・むね？

ふにゅ、という効果音がしたような気がした

『ふにゃ・・・触るな！』

エセ関西青髪ピアス野郎に自分の胸が当てられへんなこえが出て・・・  
恥ずかしくてつい大声を出してしまった・・・

それにしても失敗したな、『カリスマ威厳』をつかってしまった

悪魔独特の威嚇、まるでクラスの中に居る生徒は心臓でもつかまれ  
たような感覚だろうな・・・

「はは、信じられねえのはわかるぜ」

む、当麻がしゃべれるって言うことは失敗したか？、これは呼吸さえも止めれるものなのにな・・・

いやクラス全体、凍ったようになってるしエセ関西青髪ピアス野郎は冷や汗も流しているし・・・??

当麻だけが、利いていない・・・なぜだ

それよりも先に威嚇をとめなければな、これ以上したら呼吸困難になりそうだし・・・

「ふたにやんの殺気がこんなに怖いとは・・・」

『ふたにゃんとは、私のことか？エセ関西青髪ピアス野郎？』

「ふたにゃん、あと変態が入ってないにゃ」

『お前もふたにゃんと言うな』

こういった具合で私の高校生活は始まったが・・・・・・・・・・・なんか扱いがひどいな

## 第七話 再会（リユニオン）

今日は7月16日、おきた時間はいつもどおりの6時20分

高校に入ってから毎朝早くおきる私は一人暮らしということもあり料理を覚えた

『そろそろ当麻を起こさないとな、前みたいに寝坊されては困る』

そして6時50分になると同時に当麻を起こしに行く、これも日課になってきている

そしてまたまた、いつもどおり魔術で不法侵入した……これは鍵が無いからしょうがない

『当麻、起きろ』

返事が無い……まあいつものことだがなあ……たまにはすぐにおきないか？

それに気持ちよさそうに寝ているのを見ると私も眠くなる……ふあ

当麻 side

「ん、ふぁー・・・朝か、って双葉っ!？」

おきてみたらいきなり双葉が俺の横で寝ていた

・ 起こしてもらうのはいいけどこういう事がたまにあるんだよね・・・

「それより今は・・・7時20分、時計も壊れてないみたいでせうな」

ふう、やばかったやばかった、それじゃあ起きて制服に着替えm 『グイッ』・・・what?？」

『むにゅう・・・』

あれ? 上条さんの腕が固定されて動かないな、なんでかなあ?

ギギギという効果音が似合いそうな首の曲げ方で腕を見ると・・・

「これは死亡フラグ？」

まじかよ、双葉ががちりとつかんでまするよ?

そして俺は気持ちよさそうに寝ているので、起こすのも悪いと思って小さく口を動かした

「・・・不幸だ・・・」

「なんで朝っぱらから横で寝てるんでせうか？」

『うるさい当麻、第一お前がおきないのが悪い』

目覚めの一言はそれか・・当然驚くだろうがおきないお前も悪い

さて時間は7時30分か、ぎりぎり間に合いそうだな

『当麻、さっさと朝食を食べていくぞ』

『当麻・・あれは大丈夫か？』

「ん？あ・・・」

私たちが高校に行く途中に路地裏で茶髪の女生徒が数人の男に絡まれている

さて、私には喧嘩するほどの体術なんてものはないし、当麻も見た目そんなに強くなさそうだな



魔術も当麻や一般人の前で使うのは極力避けたいからな・・・

「俺ちょっといつてくる」

ここで人格者の当麻は出て行った・・・当麻はたぶん喧嘩になってもすぐに逃げれるだろうな、体力ものすごくあるからそっちなほうが誰もきづつかない

それでは私は女生徒のほうをどうにかしよう、早く離れさせたほうがいいn『バチィイ!!』・・・能力者か・・・

「風紀委員ですのっ! 通報を受け・・・て・・・」

風紀委員もきたか、ややこしくなりそうだな、面倒くさい・・・

「ああ、黒子」

「お姉さまっ!?!」

「・・・げっ、ビリビリ逃げるぞ双葉っ!」

「え、ああっ! あんたっ!?!」

私はそのまま当麻に手を引かれて走っていった

はあ・・・面倒くさいな

「はぁ・・・」

「その様子なら上やんはまたLEVEL0にゃ？」

この学園都市ではLEVELによって奨学金が出るといふ

だからみんなLEVELが高いほうが当然喜ぶだろうな

「で、双葉はどうやったんや」

『私も0だ』

この青髪ピアスはどうも気に食えん・・・なぜだろうな、拒絶反応と  
言うやつか？

「まあ上やん、落ち込まないで、この後どっかいこうにゃ」

「それなら双葉も行こうぜ」

『残念なんだが、私は病院にいかねばならない』

それに私はあまり外に居ては倒れてしまうからな、それではみんな  
は楽しめないし、なにより心配かけるのは嫌だ

行きたいのもやまやまだが・・・はぁ、早くいつてさっさと帰ろうか・  
・

私はビタミン剤の薬を十種類ぐらいかって、朝飲むのを忘れていたので近くの喫茶店によってドリンクと一緒に錠剤を口に放り込んでいた

そんな時、朝の女生徒と、風紀委員と名乗っていた学生が入ってきて、私のすぐ隣の席に座った

最初はばれなければいいなと早めに帰ろうと思っていたが・・・茶髪の少女はどこかで見たような・・・

「黒子はもう、黒子はもうどうにかなくなってしまいそうですのっ！」

くそう、思い出そうとしてあの女の姓で思い出せない、うるさいやつだな、もう少しおとなしくしてほしいものだ

「お客様、こういった行為はほかのお客様の迷惑になりますので・・・」

ほらみろ、あの店員の引きつった笑顔を見てみよ、かなりひいてるぞ・・・でもまだ離れないし、そして窓の外の学生からも引き気味に見られているぞ

それにしても目がハートになるとは・・・これも超能力なのか？

さて、あの騒がしい二人も出て行っただし、薬も飲み終えたことだし帰ろうかな

と思って出てみればすぐ近くに居るではないか

そこは私の寮の帰り道なのだが・・・遠回りしてでも帰ろうかな  
私は今足を進めようとした方向から180度回転して逃げるように帰ろうとしたとき、茶髪の少女は口を開いた

「初春さんに佐天さん・・・私は御坂美琴、よろしく」

?????

『どさっ』

私は両手に抱えて持った薬の入った袋を落とした

今、なんといった?

ミサカミコトといったのか?

私に・・・初めて・・・声をかけてくれた、あの美琴?

いや、勝手・・・というわけではないが、どこかにいったやつのことだ、覚えているはずも・・・ないよな

「あれ、あの子どうしたんですかね？荷物落として固まって？」

「あ、本当だ〜」

しまったな、袋を落とした性でこちらに気がついたか

だが私は、葉をとって逃げる事ができなかった

昔の友人に会えたことがうれしかったからだ

こんなに・・・こんなに、うれしいと思ったのはいつぶりだろうか？

この世界に来て、初めてではないか？

「あゝ、大丈夫？、何かあったの？」

そうだ、このヘアピン、私があげたものだ、やはりこの少女は『御坂美琴』だ

『美琴？』

一応だ、本当にそうか確認しなければ・・・友人を疑うのは正直心が痛むな・・・

「え？あ、そうだけどどっかであったかな〜？」

「あら、お姉さま知り合いですの？」

美琴は頭をかきながらあはは〜と乾いたような声で笑っていた

やはり覚えていないか・・・それとも別人か・・・

だが別人なら私の名前は知らないだろう・・・

なぜなら学生で私の名前を知るのは、同じ高校の生徒と――――

『私だ、双葉、綾瀬双葉だ』

――――美琴だからな

美琴 side

「あれ、あの子どうしたんですかね？荷物落として固まって？」

「あ、本当だ〜」

初春さんと左天さんが向いている方向を見ると、文字通りかたまつた子供が立っていた

後姿でよくわからないから、近づいて私は子供にどうしたのか聞い

てみた

「あゝ大丈夫？、何かあったの？」

無表情っぽいんだけど、なんだか戸惑ってるような感じかな

それとなんだかどっかで見たようなこと・・・

『美琴？』

「え？あ、そうだけどどっかであったかな？」

「あら、お姉さま知り合いですの？」

笑ってごまかしたのはいいけど、やっぱりあったことがあるのかな  
？？

私を名前で呼ぶ人なんてほとんどいないんだけど・・・

と思って、記憶を探り出そうとした時に、目の前の子供は口を開いた

『私だ、双葉、綾瀬双葉だ』

ふたば・・・双葉・・・って、もしかして

「ふたねえ?!」





## 第八話 原作開始（スタート）

「ふたねえっ!？」

うむ、その呼び方は絶対に美琴だな、懐かしいな・

『久ぶりだな、美琴はもう中学生か?』

「お姉さまっ!この生意気な子供は誰ですの?!」

・・・こいつはさっきの・・・せっかくの再会ムードを壊して、それに子供とは・・・

『私はお前らより子供じゃない、それとお前、さっきの喫茶店はうるさかったぞ』

私は薬の入った袋を拾い上げながらそういった

「私たちよりも年上・・・確かに御坂さんはふたねえって呼んでましたね」

「そうなんだけど・・・本当にふたねえ?8年前とあんまり変わらないけど・・・」

「」「え?」「」

確かに、私の容姿はあの時からほとんど変わっていないな、しいて言えば身長が少しだけ伸びたくらいかな

『説明は歩きながらしよう……』

「そんなひどいこと……」

私は四人にこの八年間何をされていたか大半のことをしゃべった  
すべてではない、中には本当に過酷なものがあるからな

昔から沸点の低い美琴に話したら激怒しそうだな、今も拳を握りフ  
ルフルして、少々起こり気味だが

それにしても私のために怒ってくれるとはすごくうれしいな……

「じゃあ、双葉さんは今まで、その多重能力や原石と勘違いされて  
研究されたてたんですね？」

頭に花飾りをつけている少女が話しかけてきた、この花……  
なぜだろうか、むしろように荒らしたい……

『ああ、そうだ、この体はそのせいで全く成長しなくなって……  
・それに薬が絶えない毎日だ……まあ生きていけるだけよしとし  
よう、そんなに悲しい顔をするな』

同情はされるのはうれしくない、私も悲しくなるし、なにより笑っ

ているほうが美琴にはあうしな

「でも、なんでそんな勘違いされたの？」

さて、そう聞かれるのはわかっていたがなんと答えようか・・・変に答えて怪しまれては困るし・・・

『さっき言ったように監視カメラに私が複数の超能力を使ったように見えたといったな、それは私ではなく助けに来てくれた学生たちのものだ、だがカメラに映っていたのは私だけ、それに私は襲われるとわかっていても堂々としていたからな、まったく、あの時は少しくらい怖がればよかった・・・』

苦笑いをしている四人だが、ざっとこんなものだろうな、次はなんと聞いてくるかが問題だ・・・

私は次にどんな質問が飛んでくるのかと思い、少し身構えた

「ひどすぎますのね・・・」

ここに来て初めて普通の声を聞いたような気がするな・・・

『私はこの学園の孤児、すなわち置き去りだ、いやそれよりも低いだろうな、私はこの都市に売られた存在だから、人体実験されるために来たようなものだ、それに私を売った家族が幸せになっていれば私はそれでいい、何より私は生きている、これからもっと楽しいことをすればいいのだ』

こんなに長くしゃべったのは初めてだぞ・・・

私は口の中の構造も小さいからしゃべり難いんだよ・・・

「でも『それじゃあこの話は終わりだ』

美琴はなんだか気に食わない顔をしているがしょうがない、お前がそんなに怒っても何もならないんだぞ？

ほら、そんなに強く手を握っていると、本当に血が出そうだぞ？

『すまないな、これ以上空気を悪くしても悪いから私は帰ろう・・・

』

私は足を180度し、四人とは逆方向に向かって歩こうと、一歩足をふみだした・・・いや、逃げたのだ、私はこれ以上自分のために・・・私のために怒ってくれる美琴をみるのが・・・うれしくて・・・ないてしまいそうだったから

だが美琴は私をそう簡単に帰してはくれなかった

「ちょっと待ってよ」

そういって、私の右手をとって

「久々の再開なんだから」

私の向きを美琴の方向に変えて

「その楽しいことやろうじゃない！」

笑っていつてみせたのだ

美琴は昔からそうだな、いつもいつも・・フフ、こういうときこう

いうんだよな

『ありがとう』

だから私は、できる限りの笑みで答えを返した

『そしてなぜこうなった・・・』

私は地面を向いて落ち込んでいた



美琴がクレープを食べたそうに、いや、あれはそのオマケのゲコ太というストラップをほしそうにしていたからクレープ屋に来た

昔からああゆうのが好きなのに、なぜ隠す必要があるんだろうか？

そして事件は此処でおきたのだ・・・

「みんな～自由行動は一時間ですよ～」

どこかの観光客に間違われて、「君迷子？」と声をかけられたりしたり、しまいにはバスガイドの人のところまでいったり

しかもこのバスガイドがそうですよって・・・はあ、なぜだ

「まあ、あなたの容姿ですから、しかたありませんの」

「ちょ、言いすぎですよ白井さん！」

『別に本当のことだからいいんだがな・・・はあ』

ちいさくため息をつく、黒子と飾利は人の多さのため、私に席を確保するといって無効のベンチに行った

「お待たせいたしましたー」

む、私の番だな、何を食べようか・・・そういえば糖分を取らないと悪かったな

とりあえず糖分多めのものを頼もう

「はい、最後の一個ですよ」

これか・・・そんなにかわいくないな、というか実際のかえるというものは気持ち悪いのだから・・・

まてまて、それよりも店員はなんと言った？

最後の一個？

ということは

『ドサッ』

美琴は地面に足をついていた・・・まったく・・・

『美琴、これをやるから早く頼め、後ろの人が迷惑だぞ』

「え、あ、ありがとうー！」

はじめから前にいかせてとか言えばいいのにな

その後私は黒子と飾利がとっていてくれたベンチに座って、皆が食べ始める前にクレープを口にした

口が小さいので食べるのが遅いというのもあるが実際はおなかが減っていただけである・・・

悪魔のときは食事という習慣がなかったからなあ、正直こういうのは楽しい

一人黙々と小さい口で食べていると、美琴と涙子が戻ってきてみんなで食べ始めた

「あ、ふたねえのおいしそ、ちよつといい？ 私のもあげるから」

『ああ、いいぞ』

私の持っていたクレープを美琴の口に近づけて食べさせた後、美琴が私の口に近づけてきたクレープをたべた

・・・あれ・・・私は男なんだけど、こういうことはいいのか？  
間接キスとうやつなんじゃないのか？

というかまで、美琴は私をふたねえと言っていたから・・・たぶん女と間違えてるんじゃない・・・

それは色々まずい、早く言わなければ

『美琴、私はおとk「あれ、あそこの銀行なんでシャッター下ろしてるんでしょうか？」

嗚呼、私の台詞はいつも邪魔される・・・なんだ、これは天罰なのか？ 私がいつ悪いことを・・・悪魔のときしたな・・・

まあそれよりも、飾利の言ったとおり、あそこは怪しいな

昼間からシャッターを下ろして・・・それに此処は今日は定休日ではないはずだし・・・

『ドコオオオオオオオ！！』

はあ、面倒くさい・・・

## 第九話 空間移動（テレポート）

「初春！アンチスキル警備員への連絡と、怪我人の有無の確認をつ！！」

風紀委員というのも伊達ではないな、ちゃんとした対応ができているし

相手は三人、さっきの爆発から見て能力者は最低でも一人いるだろうな

さて、私は能力者『では』ないから、離れていよう

「風紀委員ですのっ！！器物破損、及び強盗の現行犯で拘束します！！」

始まったな、黒子の能力は知らないがああ常盤台という優秀なところの学生だ、あんなやつらには負けなだろうな

「なんだあ、このガキは！？」

「風紀委員も人手不足かよっ！！」

「「「ヒヤハハハハハ！！！！」」」

声を合わせて・・・無駄にいきびったりだな60点、40点は声が汚いからだぞ

・・・それはおいといて、馬鹿どもが、見た目で判断するとはな

最低でも能力者一人と無能力者二人相手でもまったく動じずに立ち向かう黒子の実力もわからないのか？

それもわからないようなら、あいつらはたぶん瞬殺だろうな

「お嬢ちゃん、とつとどつか行かないとお——」

「怪我しちゃう・・ぜっ！！！」

手を振り上げて黒子に襲い掛かるが・・隙だらけで倒してくださいって言ってるようなものだな・・

「そういう三下の台詞は——」

無駄の無い動きで強盗の拳をよけると足と投げの要領で、強盗をのしてしまった

「——死亡フラグですわよ？」

ふむ、能力を使わずにあのがたいのいい男を倒すとはなかなかのものだな

それにしてもあいつの能力はなんだろうな、さっきの喫茶店では目がハートになってたし・・・・・気になる

確か常盤台はLEVEL3以上しか入れないはずだが、戦闘には不向きかもしれないからな

さてさて一人倒してあとの二人はどうするかな

たぶん倒された男は能力者ではないだろうから一人、爆発を起こせる様な・・・たぶん発火能力者がいるだろうから――――

「すごい・・・」

「さすが黒子ね」

――こいつらはまだここにいたか・・・まあ美琴は常盤台だから大丈夫だろうが、涙子は無能力者だからさっさと逃げないか

それよりも気になるのはあそこの・・・さっき私を迷子だと勘違いしたバスガイドは何をしている

能力者の戦いだから、早く逃げないと怪我するかもしれないぞ？

「男の子が、一人居ないんです！！少し前に、バスに忘れ物をしたって言ったつきりで・・・」

バスガイドに初春が声をかけると、なんだか面倒くさいことになっていたようだな

「じゃあ、私達も探します！！」

とかしている間に黒子は強盗と対峙しているな、強盗の能力は――――

「今更後悔しても遅えぞ……」

――やはり発火能力者だったな、銀行から出るとき爆発したからな

「俺を本気にさせたからには・・・消し炭になって・・・逃がすかあ

っ!！」

そんな炎で消すズミになるか、まったくほざくのは強くなってから  
言え

黒子に炎が飛んでいくが・・あの様子じゃ大丈夫だろうな、私はい  
なくなった子供を捜すか

「誰がっ——」

む、消えたということは視認できないほどの高速移動、光の屈折で  
姿を消す・・あとは空間移動か・・

「き、消えたっ!？」

「——逃げますの?」

頭の位置に來たか、たぶん空間移動だな

そういえば空間移動の能力は便利がいいから重宝されているらしいな  
もし私が魔術を使うときは一つに絞った方が多重能力とも勘違いさ  
れないし、空間移動でもつかおうかな

「テレポーター!？」

「これ以上抵抗するのなら、次はこれを体内に直接テレポートさせ  
ますわよ?」

おお、空間移動は体内でもいけるか・・逃げもあれば攻めもある、



本当に便利だな

『私の空間移動の魔術』は物質上には転移できないからな

でもまあ、あっちのほうの方が便利がいいがあれば間違つて人殺しになるかもしれないしな・どっちもどっち、というやつだな

さてと、後の一人は何処にいったのかな？

「何だテメエ！？ 離せよっ！！」

「だめえっ！！！！」

！！ついた・あの男め、女の顔を蹴るとは、悪魔でも自重したるするのだぞっ！？

初耳かもしれないが、いがいと律儀かつ丁寧が悪魔のもつとうなのだぞっ！

「黒子っ！！」

あ、あー・・・・・・・・・・きれてしまった美琴はどうにもならないな

まあ、一応美琴の能力も知リたかつたしちようどいいな、少し期待しよう・・

それよりも黒子が空間移動の能力なら目がハートになったのはなぜだ・・・・はっ！もしかして多重能力者っ！

なわけないな・・・・たぶん・・・・直感がいつている・・・・・・

「こっからはアタシの個人的な喧嘩だから。悪いけど・・・手、出させて貰うわよ？」

黒子は少し苦笑い・・・まあ、あの怖い顔見ればわかるが・・・

でも相手は車、あの様子じゃひき殺そうとでも思っているし、さて、美琴は何をするかな

・・・ポケットから出したのは・・・コインか？

コインを使った技か・・・ん？

確かLEVEL5にそういったやつがいたような・・・確か、レベル・・・レールガンだったかな？

ふう、研究員、感謝しよう、私に教えたLEVEL5の資料が役に立ったぞ

美琴は今から超電磁砲をうとうとしているな

馬鹿が・・・たとえば手加減したり、掠めるぐらいでも、あんなもの撃ったら、下手したら死んでしまうだろうが

いくら友人を蹴ったからといってな、殺すことは無い

だから・

『とめないとな』

『パチン』

指を鳴らして私は半径100 m超の距離の機械を停止させた

これは今から行うための、魔術を使用するために誰にも見られたくないからな

まったく、さっき考えていたことがまさかこんなに早くに・・・これからは空間移動をつかっていこう

それでもばれたくは無い、ちゃんと姿は変えよう

私は辺りを確かめて、自分を見ているものがないかを確認した

みな、美琴と黒子、それに車に乗った犯人に注目しているため誰一人と私のほうを見るものはいなかった

急いで術式を展開、発動、そして姿を変え、『超電磁砲の打ち出された瞬間』車と美琴の間に転移して立った

「えっ!？」

美琴は驚いているな、まあ撃った直後に超電磁砲の軌道に出たからな唸りを上げてくる超電磁砲は後一瞬で私を貫くだろう

『ビュオオオオ』

私は超電磁砲の軌道上に手を置き、超電磁砲に『触れた』

激しい痛み、少しビリビリもする

そんな傷みも本の刹那の間、コインは空の見えない場所に転移をした

く・・・さすがに無傷はダメか、かなりえぐれたがまあ魔術で直そう・・・後は車

『ブオオオオ』

こちらも轟音をあげながら私に向かっていた

だが残念だな、超電磁砲をとめれるのだ、たかが車を止められないわけが無いだろう？

私は超電磁砲と同じように車が触れた瞬間に、さかさまに転移させた・・・おまけで2，3m上にだが・・・

ドゴンと車が落ちて中の強盗が泡を吹いて気絶しているのを確認すると美琴のほうに振り返った

超電磁砲は怪我したが車は無傷で成功したな

あてさくて、超電磁砲を撃つなんて、最後はちよつと説教しないとな  
私はいまだ啞然としている美琴に近づいていった

目の前に来て、少しきついめでにらむと、肩が震えるのがわかった・  
・まあ説教だ、怯えてるぐらいがちょうどいいか

『これからは超電磁砲なんて、人に向けて撃つな

今回は私が止めたが、手加減しても超電磁砲は超電磁砲、人は簡単  
に死ぬぞ』

「え・・・あ、はい・・・」

美琴が頷くのを見て少しの間間を空けて私は口を開いた

『わかればいい』

そんな落ち込んで、悲しい顔をするなら最初からやるなよ・・・

まあ注意したからこれからすることは無いだろうな、ちゃんと考えてくれるだろう

『わかったならいい、じゃあ私は「ちょっとお待ちを・・・」・・・』

私は怪我をしていない左手を美琴の頭に置き、帰ろうと体を返したとき、黒子が声をかけてきた

黒子、逆にお前は笑顔で怖い顔をするな、殺気が目に見えている・・・やばい、人間に少しだが恐怖を覚えた・・・天使100人相手した時にも恐怖を感じなかったのに・・・

「犯人確保ありがとうございます・・・が、風紀委員でもないのにこんなことをするなんていいと思っっているのですか？」

まあ・・・当然の反応か、だがなそれは少し間違っているかもな

『それでは返そう、お前はあの超電磁砲を撃たれた犯人が死んでた場合どうする？』

私は少し強い口調でそう質問を尋ねた

言葉を言い終えたから、私は子供相手に何を言っているのかを思い出し少し後悔した

「くっ・・・それはそれ、これはこr『死人をそれはそれ、ですますのか?』・・・いいえ・・・」

一瞬口を止めたがもう一度言葉を発しようとしたが、私が言葉を挟んで言い返すと力なく返事をした黒子

だが私はその言葉を覚えていてほしい

そんな言葉は許さない・・・後さっきから私の言葉をとめられて少し頭にきているのもある・・・1割ぐらい

・・・さて、気まづくなった・・・きまづくなった・・・気まづい

『・・・それでは私は帰るぞ』

「あ、待って!」

ハヤクコノバヲハナレタイ、コレ、ワタシノホンネダ

ジト目で振り返ると、さっきよりは目に力をもした美琴がいた

「あんたの能力と・・・LEVELは?私の止めれるなんて・・・超電磁砲をとめるなんて」

『能力は空間移動だが、とめたとはいえ、それなりの怪我はしたぞ

？  
』

私は右手を美琴の前に出して、生々しいやけどの跡を見せた・・・  
あ、これ骨？なんか白っぽいものがあるな

すぐに手を引っ込めたが、ああ、絶対に見られたよな・・・はあ

『LEVELは知らない、じゃあ私は帰る』

私はすぐに寮の、自分の部屋へと空間移動した

ちなみにその間に姿を変える魔術も解除、手も直し、靴は別に玄関  
に空間移動させた

何キロも離れている距離を一発だけでも人間の演算能力ではむりだ  
ろうな、でも一応私でも頭痛はする

さてと、家に帰ってきたことだし――――

『寝よう』



真っ先に布団に入った

## 第九話 空間移動（テレポート）（後書き）

テレポートでは雷みたいに実体の無いものは転移できないはずですが、双葉のはそこにある空間ごとを、別空間に飛ばす、という手段をとったのでできるのです！・・・実際はできるかどうか知りませんが・・・

なので双葉と黒子の空間移動は演算は似ているけど、少し違うものであり、空間移動者には空間移動できないというのがありますが双葉の場合黒子を飛ばす、又は黒子から飛ばされることはできます

超電磁砲を飛ばす際は超電磁砲が双葉の手に当たる時間を演算で算出、そしてそれと同時に超電磁砲を飛ばしたので見た目だけなら上条さんの幻想殺しに見えます、現に美琴はそう思っていました・・・まあそれはまた今度の話で

## お知らせ

小説をご覧になってくださっている皆様

私u pる委員長は中学3年生です

故に!!

もうそろそろ受験ですね・・・(鬱

そして今日模試的な何かで最悪な点をたたき出しました・・・嗚呼

まあいわなくてもわかる人も居るでしょうが

約二ヶ月弱の間ですが受験なので暫く投稿を控えたいと思います

私はそれでも最低2週に一回の投稿、できれば週一の投稿をしたい  
と思っていますので、どうぞ私の駄文をよんでくださいませ!!

それとずうずうしいですが、感想や批判、誤字脱字報告はなるべく  
してくれると嬉しいです!!

それでは、また!!

## 主人公の説明

綾瀬 双葉

身長 125 cm

体重 26 kg

容姿 少し大人びた顔立ちだが、身長が身長なので小学校低学年としか見られない

髪<sup>の</sup>毛は軽いウェーブで左目には人間の母親ゆずりの泣き黒子がある、男の娘

能力 魔術（とある魔術の禁書目録にでてくるのとは違う）

AIM拡散力動場は見られないために、レベルをはかっても能力者ではなく、無能力者（LEVEL0）とされている

そしてさらに研究所で長年研究されていた理由の一つは『樹形図の設計者』<sup>ツリーダイアグラム</sup>かそれ以上の処理能力、演算能力があるからである

また人間の脳にはほぼ不可能なので、脳を魔術強化してある

双葉、魔術で変身後

身長 175cm（思いのままだがこれが安定する）

体重 思いのまま、概念が無い

容姿 顔は整っており、少し長めの漆黒の髪と目（本当は金色の目、詳細は下に

双葉の男の悪魔の容姿、といっても双葉の悪魔の姿は男1人、女2人の姿、動物3種類がある

詳しく言うと、男1 悪魔のときの容姿、戦闘時に良くなる  
ことがおおい、細かい説明は上としたに

女1 高身長、容姿端麗の美人系、基本的に  
戦闘時に使うことが多い

女2 一言で言えばロリ、今の双葉をそのまま  
美女にして金髪、紅蒼のオッドアイ

動物、黒猫、狼、燕の三種類、左から順番に  
よくなるもの、ちなみに狼はフィンネル

悪魔の特殊能力ともいえる『威厳』<sup>カリスマ</sup>が常時発動しているため、穏やかな時は異性をひきつけ、逆に荒い時は人間に恐怖感、圧迫感を与える能力

第六話の高校に転校した日に見せたのはこの特殊能力の応用技

双葉の場合は、変身前ではこの能力を消したり、発動したりとできるが、変身後はつよすぎるため操作がきかない

当麻がきかないのはこれが『悪魔』というこの世に存在しない異能力』なので幻想殺しで消せるから

そしてもう一つの特異能力『神眼』、または『魔眼』といわれる能力  
見えないものを見たり（AIM拡散力動場、魔力など）、見たものに幻術をかけられたりする

視力もありえないほど良くなるが、一時的に『視野』という概念を消して、何十キロもはなれた場所を把握することができる

現在地点の裏側も時間はかかるが見れる

この能力の使用時は目が金色になり、何秒か直視した生物は、生命力も削られる

使用時、というが変身時は常時使用状態なので、能力は低下するが魔術で黒く見せている

## 魔術とその限界

### 第九話で使用した空間移動の魔術

黒子のように、『AからBに空間を移動させる』ではなく

『A地点にあるものをB地点の場所にもとからあるように世界に『誤認』させる魔術

誤認させるので、その場にものがあると『証明』されていれば、そこには移動できない（空気などはいい）

その場合は飛ばそうとした地点から一番い場所に『誤認』する

双葉はこれを『座標誤認』と名づけた

物質ではなく存在なので、目に見えないものや美琴の電撃なども飛ばせる

超電磁砲を飛ばしたさいに一度触れたが、だいたい目に見える範囲ぐらいならば転移可能

さらに神眼発動時には世界の裏側まで可能になる

触れたのは空間移動者と美琴たちに思わせるため

第四話、第五話に使用した炎を出したり氷を出したりする魔術



正確には分子の温度を操作できる

氷を出すことはめったに無い、なぜなら空気中の水分量が少ないので出来たとしても5cmくらいの氷しか作れないので

第四話の場所は配管からもれた水などで水分が結構あったから

『体感したことのある温度』までという上限などはあるが、双葉の場合は悪魔のころ絶対零度を体験し、10000℃という馬鹿げた数値の温度も経験しているので基本は関係ない

人間界にはしたの上限は-273.15℃と決まっているが、天界の絶対零度は一応それ以下がある

そもそも+（プラス）-（マイナス）以外にも温度の概念がある

だが人間界ではその法則は破れないため下の限界は-273.15℃が限界

次の魔術を説明するさい少し触るので下の魔術を説明します

ある程度の時間を操る魔術

ある程度、というのは双葉が時間を操作するうえで0倍、動きを止めることはできなく、範囲も10倍程度から0, 1倍程度しかできない

それでも十分だが神の場合は0倍可能、20倍程度、0、05程度ができる

自分だけなど任意のものも変更可能

0倍ができない理由は、自分以外のものをとめた場合は空気中にある物質や光さえとまってしまうため、呼吸も何もできないため

任意のものをとめた場合は、例えば超電磁砲を0倍したなら、一時的にだが雷が実体化してしまい、そんな事は不可能なので世界がそのことを『拒絶』し結果魔術は失敗する、という理由です

簡単に言えば、『世界の法則を無視したため、世界がその法則をさまじゅつらに無視した』からである

神ができるのは神自身が法則ルールだからです

それと0ができるなら0、 $\infty$ 倍もできるのでは？と思われがちだがその場合は世界が崩壊します、理由は長すぎるので省略しますが簡単に言うと『世界的大規模な破壊力』が生まれるからです、神が操れるのはそこらへんを操れるからです。

## 第五話で使用した、治癒魔術

これは少し魔術の中で特異な魔術

無かったことにしたり、ある状態に戻したりできる魔術

速度変更とは別に、時間系の操作、速度変更は倍速しかできなく、巻き戻すことは不可能なので、時間移動は時間を『転移』するのと同じ

第五話につかったのは、こっちの時間操作で、基本的には怪我の治療などに使う

これは演算が複雑で発動に十秒程度かかる

例で言えば10桁の掛け算を5, 60と同時に計算して、尚且つ複数の人間と全く違うことを同時に話すこと

本編ではまだ登場していないが、研究所時代に一度だけ『とある最強』相手につかった魔術

直接触れた、又は目線があった生物の思考を操作できる魔術

相手の記憶をそのまま取ったり、作った記憶を植えつけたり、思考も読める

だが人間界の生物に使用した場合、相手のほうに負担が大きいため、脳に損傷を与える可能性がある

なので双葉はこの魔術を滅多に使用しない、だが1, 2回程度なら人間にはあまり影響なく使用可能

思考を読むのは相手の脳に負担はかからないが、読まれている相手は不快感などがおきる

記憶の読心・人格の洗脳・念話・想いの消去・意志の増幅・思考の再現・感情の移植ができるため心理掌握と非常に酷似している

以上が魔術の説明です、そして基本的に双葉の魔術は何でもできます

ちなみに発動条件は、術式を組む↓魔力を支払う↓発動、という順番です

術式はステイルのルーンなどと同じようなものです、双葉の場合は術式を脳内で構成して発動できるのでルーンは必要ありません（人間では無理です）

すでに最強ですが、それでも悪魔のときのパーセント未満の力で、さすがに魔術で強化しても限界があるので

それに双葉は人間としての体力が少なすぎるので長期戦は基本無理、魔術で回復したらそのぶん魔力が減るのでどっこいどっこいなのです

そして魔術で倒せない相手もあります、例で言えば幻想殺しの当麻、一方通行の反射で大半ははじかれます

テレポーターの空間移動は反射されますが、座標誤認は方向ではなく、元からそこにあったことにするので反射はされません、しかしそこに物体がある場合は転移できないので体内に移動はできません  
特殊能力に関しては威厳はきいて、魔眼は聞きません

威厳は雰囲気を変えるような力なのでベクトルは発生しません

魔眼の場合は視力は上がり、AIMなども見ることはできますが、幻術は効果があるのとないのがあります

魔眼の幻術は脳に直接かけるのと、五感を通じてかける、の二つがあり前者は可能、後者は不可能です

記憶掌握も可能ですけど、これの使用条件の一つは触れることが最低条件ですので常に反射している一方通行には使用できません

もう一つの視線をあわせる、は相手が目線を合わせてくれないと無理なので使えません、拘束しようにも拘束系の魔術は反射されます

なので一方通行には勝ちにくいです

## 第十話 正体不明（アンノウン）

双葉とであった日の夜の常盤台学生寮にて――――

「ねえ黒子・・・空間移動って私の超電磁砲止めれるものなの？」

双葉が姿をかえ、超電磁砲をとめたことが信じられず、美琴はパソコンを前に、後ろのベットに座っている黒子に聞いてみた

「音速の3倍の速度なんてとめれるはずなんて・・・できるわけ無いでしょうね」

黒子も同様に今日の出来事が信じられない状態でいた

やっぱりか・・・はあ、書庫で空間移動者を片っ端から調べたけど、『あの人』の顔が無いのよね」

登録してないのか・・・それとも別の能力か・・・いや、確かに使った能力は転移系だから別の能力は可能性が低いかもしれないわね

じゃあ、やっぱり登録してないのか・・・

「・・・お姉さま、あの殿方と勝負、なんていうことはおやめになったほうがいいですよ」

黒子の言ったことに少し動揺しながらイスを180度回転させると黒子を見た

腕組みをしながらフンツと鼻を鳴らしながら口を開ける

「別にやらな「お姉さまが負ける姿など見たくありませんから」・・・」

美琴は言い返すことは無く暫く黙ると、再びパソコンとにらめっこを始めた

いくらLEVEL5の第三位にしても、不利な相手もいる

空間移動者もその中に入るであろう

電撃は自身をテレポートすることによりよけ、攻撃はとりあえず何かを体内に転移すれば勝てる見込みはかなりある

ましてや超電磁砲すらとめた双葉に、美琴は敵わないだろう

わかってるわよ・・・あの空間移動者、私は学者じゃないからわからないんだけど、コインだけじゃなく実体の無い『電撃』までとばすなんてできるのっ!?

身近に居るし・・・黒子に一応聞いてみよっか・・・

「黒子お、私の電撃ってとばせる?」

「・・・一応できるかもしれませんが、その前に空間移動の条件の『触れていること』ができて電撃があたっては演算ができる状態ではありませんの

あとは座標移動なら・・・いえ、あれも電撃は飛ばせないはずですし、第一早すぎて演算が間に合わないでしょうね」

はぁ・・・じゃあ、あの人は嘘いつてる可能性があるわね、LE  
VELの高い黒子でさえできないなんて

そういえば怪我して骨が・・・なんか悪いことしたような・・・でもあんまし痛がってなかったしいのかな・・・いやよくないわね、さすがにグロかったし

「あぁもうっ！わかんないっ！！」

はぁ・・・結局空間移動者以外何もわかんなかったわね・・・

ギシという音を上げながらいすの背にもたれかける美琴

黒子はその様子を見てはぁ、と小さくため息をつくと立ち上がり口を開けた

「お願いですので問題は起こさないで、風紀委員の立場も考えてくださいな」

ジト目で憧れの問題児みことに注意をして布団にもぐりこんだ黒子であった  
それと引っかかるのよね・・・誰かに似てるし、しかも男で私とか  
言うのは私の知ってる限り・・・いなかったわね

双葉を男という事実を知らない美琴はあと少しで答えを見出せそうになるが、選択肢が消えたため思考を止めて布団にもぐりこんだ



そして恒例行事の黒子が布団に入り込む↓ビリビリ↓寮監がくる↓  
涙目でおわった夜であった

## 第十一話 体調不良（ただのねつ） 前編

「不幸だ〜」というなんとも悪趣味な目覚ましで私は目を覚ました

というか目覚ましではなかったな、当麻の声か

珍しく当麻が早起きとは・・・時間は

「っ・・・」

私は時計のある方向に向こうとしたとき、激しい頭痛が襲った

頭痛がひどいな・・・

それと時計を確認すれば追い討ちをかけられた、7時50分では絶対  
対に遅刻

となりの部屋では当麻が急いで着替えをしているのかドタバタと音が響いている

目が覚めて数分たったころだろう

ガチャガチャと扉を開けて当麻が侵入してきた

ちなみに扉は私が体温計を取るついでに開けといた、タブンくるだろうからな

「双葉、今日は寝坊か？ いそがねえと遅れるぞ！！」

「ああ・・・だが学校には行けそうには無い・・・」

ちようどいいタイミングでなった体温計に一度目を通して当麻に差

し出す

はぁ・・・この体は弱いと実感したな

「40度もあるじゃねえか！」

当麻は表示された数値を見て大げさに驚いた

昨日外に結構出てからからな、熱中症の類だろう・・・それより

「当麻いいのか、早くしないと遅れるぞ？」

時間を見る時間を・・・7時55分、遅刻だな

その後少しの沈黙の後、当麻はダッシュで部屋を出て行こうとした

玄関で靴を一瞬ではいたのは見とれるぐらいのものだった

「当麻、私の容態を見ていたから遅れたといえ、小萌先生には連絡を入れといておく」

「ありがとうございます双葉様っ!!」

見事な土下座をした、たぶん0, 1秒で・・・

そのあと風のように当麻は去っていった

「さて・・・電話しないと・・・」

重い体を起き上がらせて、テーブルの上にある携帯を手に取った

なぜか知らないが『月詠小萌』と記録されていたのでとりあえずかけた……

そういえばこの前クラスで夕飯を食べた時に全員から登録されたかな

まあ、当麻以外は着信拒否してるが

『はいはい、綾瀬ちゃんですか？』

なぜ私だとわかった……ああ、私の携帯を登録しているのか……だよな？

まあそれはおいておこう……そう思う

「小萌先生、熱があるので今日は休みます……それと当麻は朝に私の看病をしていたんで、そこところは考えてください」

『そうなんですか、大丈夫ですか？・・・それと上条ちゃんの件は善処しましょう』

知っているか、善処というのは元からやる気の無いやつが言う言葉だぞ？

まあ、この人の場合わかって言ってるだろうが

さてと・・・おとなしく寝ようか・・・

上条 side

「がぁー、不幸だぁー」

まじで上条さんは死にそうですたい

なぜこうなったかって？

なぜこうなったかって？

これ重要だから二度言っただぞ？

実はですね、双葉におかゆとか作ってあげようとか思ってね、AT



Mでお金下ろして材料買おうとしたんですよ。

o r zのポーズのまま俺はATMをみあげる

A T M は 漠 然 と た っ て い た

飲み込まれたんですよ、カードを

「不幸だ……」

「なーにやってんのよおー」

誰だよ、落ち込んでるやつに声をかける……なんだビリビリか

「な、何よ、その哀れなものを見る表情は！」

「いえ、なんでもありませんよ、ビリビリ……なんでもねえ……  
・（ズーン）」

ってこんなことしないで帰って双葉の看病しようかな

あいつは無理してそうだしなあ

「って無視してんじゃないわよっ!!」

ビリビリがビリビリした

「って、なにしてんだよ!!」

俺はとっさに右手ガードしたが、少しATMのほうへとんでいった

いや／＼な予感がしてギギギ、と首を回してATMをみる

「っ、カードがでてる！、これで双葉の飯が作れる！！」

YES！！、このときだけは感謝だ、ビリビリ！！

「え、双葉・・・ってふたねえのこと？！」

ビリビリ、俺は今から大切な仕事があるんだ、妹のようn aゲフン  
ゲフン！！・・・小さい双葉のご飯を作ると言う（あれ、咳払いし  
ただけど全部言ってるね？

「つかビリビリ、双葉のことしってるのか？」

「しってるもなにも————」

そこでビリビリの声をさえぎるように、後ろから無機質な声が聞こえた

・  
口元を引くつかせながら見れば、そこには煙を上げているATMが・

「不幸だーーーーー」

「あ、ちょっと待ちなさいよ!!」

警告音とビリビリの叫びを聞きながら俺は100m並みの速度で馬拉ソン選手張りの走りをした

結果、寮まで全力疾走した上条さんでしたよ

相変わらず体力の多さは常人に負ける気がしない

「ぜえ・・・ぜえ・・・あんた・・・ふたねえは何処よ？」

「ちょ、目が先走ってるぞ、って!! 電撃はやめろ、やめて、やめてくださいっ!!」

「あんた、ふたねえのどういう知り合いなのよ、20文字で説明!!」

「ただの同級生だっつうの、それで部屋も隣同士。だから電撃はか  
んべん!!」

右手を前に突き出しながら身を護り、ちゃっかり20文字で説明している当麻

「ただの同級生が飯作ってんの？、何？フラグ立ててるの？？」

「上条さんはそんな建築士じゃないぞ、つかなんで双葉にフラグたてんだよ！」

「ふ、ふたねえにフラグ建てないってどういうことよ！！、あの超可愛い小動物的存在を！！」

いや、確かに可愛いですけどね、青ピ曰く胸もAカップあるらしいけどね（実話）、双葉は男の娘だぞ！

あ、いや男の娘だぞ！・・・・あれ？

・・・・・・b o yの日本語訳ができないぞ？

「なんでっておとk 「お前らうるさい・・・」 あ、双葉、もう大丈夫なのか？」

寝起きのらしく目をこすりながら双葉が扉を開けた・・・あ、欠伸した・・・もうなんか男でもフラグをたててもいいと思う、いやいい！！

くただいま説教中&当麻を現実に戻し中く

双葉  
s i d e

「まったく、今度からは気をつけろ、私はまだしもほかのやつに迷惑がかかる」

「はい・・・」

どうやらわかったようだな、それにしても当麻――――

「ご飯を作るなら私の家のものを使えばいいだろう？」

「・・・・・・orz」

思いつかなかったんだな・・・哀れというか、当麻だからしょうがないというか

まあそれよりも今一番気になるのは



「で、今更だけど美琴はなんできてる？」

「私はこいつがATMの前で落ち込んでたから声をかけて、それでふたねえのこと言ってたから気になって・・・あ、そうだあんたっ！！ふたねえにフラグを建てないっていうのはどういうことよ！！」

・・・フラグ？・・・首を傾げて考えてみた

・・・旗のことだよな？なぜ私にたてるんだ、意味がわからん

「そのことだが・・・上条さんは双葉相手でもフラグは建ててもいいと思う、いやいい！！」

「ちょっとまって、なぜ旗を私に建てる？」

まったく、二人して意味のわからないことを話してなにをしている

「「え!？」」

なんだそのまなざしは・・・そのまま出て行った・・・

・・・知らない私が悪いのか・・・？

## 第十二話 体調不良（ただのねつ） 後編（前書き）

感想で質問？てきなことを書いてあったので後書きに書いてあります  
内容は滞空回線についてのことです、ネタバレ要素も入っているか  
もなので見たくない人はあさっての方向に目をそらしなさい^^（  
笑）

## 第十二話 体調不良（ただのねっ） 後編

当麻Side

「ねえ、いまの言葉聴いた？」

「ああ」

確かに聞いたぜ、『なぜ私に旗を建てる』というお言葉を

前から冗談通じないとかあったからうすうす感じてたりもしたけど、これで確信したぜ、やっぱり双葉は——

「「純粹すぎんだろっ（でしょ）！！」」

今だけはビリビリと同じことを考えてたな

「つーか何あの幼女？私の好きなどこぐいぐいついてきて、あ、もうかわいい！！」

訂正、ビリビリのほうが上がったようだ・・・

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t



『ぐう…』

——なんか作ろ……

数十分後

## 美琴Side

なーんか暴走しちゃったわね・・・可愛いふたねえがわるいんだからねっ！

って、私は誰に言ってるの・・・私もとうとう廃人（双葉中毒）逝き？

まあそれはおいといて今はふたねえの昔のことしゃべったり学校で  
のこと聞いたりしてるわけでなぜか盛り上がってる

「へー、双葉って昔っから変わってないんだな」

そうそう、こいつの言うとおりふたねえむかつっしから可愛いまん  
まだし、あと身長伸びたわね



「変わったといえは身長が伸びたくらい、でも顔は変わってないし、後胸もチヨット出てたわね」

「Aらしいな、つっても大きいかどうか知らねえけど」

いやゝ、この前胸あるのに気づいたときは驚いたわ

Aとはいえあの身長であるとは……まあ一応高校生だからねえ、見た目小学校低学年だけど

そういえば黒子のほうが小さいことに気づいてなんかショック受けて、あの時はほんっと笑えたわW W

……あれ、なんでこいつがAってしてるのよ？

「ちょっとあんた！なんでふたねえのサイズしてんのよ！！」

そうよ、男のあんたが知ってるって・・・もしかしてふたねえに手出したんじゃない！！

「え、ああ、青ピつつうやつが言ってた、っーか揉んでた？」

「はあ！？、わた、わたしでも揉んだことないのに！どこのどいつよその女っ！！」

私よりも先にふたねえの触るなんていい度胸じゃない・・・クフフフフフフフ

「んだ、お前双葉のを・・・」

「そんな変な目で見るなあー／＼／＼／＼／＼／！！！」

「うお！、やめ、ちょ、らめえーーーーー！！」

ふんっ、そこで寝ときなさい……………さて、私はふたねえに手を出したアオピとやらを殺しにいかうかな

と、かかとを返して寮から出ようとしたら急ドアが開いた

「…………お前ら、うるさいぞ」

…………デジャブ？

美琴Side out

「まったく、お前らは騒ぎすぎて・・・」

「すみませんでした！」

土下座までしなくてもいいのに・・・はあ

「私のご飯食べるけど、お前らもいるか？」

「食う！」

「ふ、ふたねえの手づくり!？」

当麻は当たり前として、美琴の目はなぜキラキラしてる？

先走ってるような感じもあるし……

まあ深く考えないようにしよう

「じゃあキッチンからもってこい、重いから」

「「おう！（わかった!）」」

大きなお皿に入れたからでもないんだ、この体は弱すぎるから・

・

自分で思っていて悲しくなるな、5、6?ももてない人間って・・・

「ご馳走様」

「いや、やっぱ双葉の飯はうめえな」

「ありがとう、それと美琴はそろそろ門限じゃないか？」

時計は6時前、門限はしらないけど常盤台は厳しいらしいし早く帰ったほうがいいと思う

あ、口をひくつかせてる・・・ということはやばそうだな

「・・・私、もう逝きます・・・」

・・・  
長い沈黙は？  
↑なんだこの

当麻もなんか悟ったような顔して、というか当麻は表情豊かで羨ましいな、私はほとんど無表情だしな

「うむ、じゃあな美琴」

「じゃあなくビリビリ」

やばい、朝の当麻よりもはやく去っていった

人間で出せる速度か？

足元なんかプラズマ化してなかったか？（↑ただの能力行使

まあ帰ったことだしあとは・・・何しようかな、食器は当麻にやらせるとして・・・選択肢が寝るしかないのは悲しいな

「・・・皿洗い任せたぞ」



「おう」

なんか忘れていのような気がしているが、今日はもう寝よう、そうしよう

おまけ（キッチンにて）

「何この・・・箱？」

当麻を見ながら、木で出来た長方形の木箱を指差す美琴

「ああ、それ身長的な問題で乗る用のらしい」

「・・・・・・・・なんか大変だね、かわいいけど」

「そうだな、かわいいのは罪だな・・・・・・・・」

→あれ、俺これ使い方うまくね？      b y当麻

おまけ2（寝る前に）

「ふたば、おわったぞ、って!!何脱いでんだよっ!!」

「む?、風呂に入るのは止めたほうがいいから拭うだけでもしよう  
と思って・・・」

「ああ、そうか・・・（ひゃっほい、もろチップイゲットだぜ!!）  
・・・orz何してんだ俺」

「倒れてないで当麻、やってくれ」

「え」

「む、男同士だし・・・嫌か？」

双葉は上半身裸の状態で上目遣いを  
つかった

コマンド

やります（普通に）

↓やらしてください！！（土下座しながら）

めっそもございません（エロ紳士風に）

上の3つ同時（全MP消費技）

大丈夫、痛くないから……（唯の変態）

上条当麻には効果抜群だった

「最後の選択肢は……ない……だろ、（ガク）」

「当麻？、あ、気絶した………しょうがない、面倒くさいが自分であろう」

何気絶してるんだか・・・私の裸がそんなに気持ち悪かったのか？

今度から気をつけよう・・・はあ

## 第十二話 体調不良（ただのねつ） 後編（後書き）

全力書店さんの感想で『学園都市を広範囲に散布したナノマシン？で監視してる設定だったようですが、統括理事長が何もしてこないのが気になります』と言われました

お読みになっている人の中でも同じ意見をもっている人も居るかもしれませんが、すみません自分の説明不足でした

一応双葉は小説中に半径100m以内の機械類すべてをジャミングしています

滞空回線も例外ではなくその中に入ります

ですがしかし、魔術を始めて使用した際と黒子を手助けした際はバれています

だがクロウリーなりの考え合って手を出していません、そしてまたこの話は今度かいてあげようと思います

このような疑問、質問がある人はどんどん言うてください

それでは全力書店感想ありがとうございました

### 第十三話 虚空爆破（グラビトン事件には実は関係ない）

「・・・当麻？」

なぜ当麻が私の部屋に・・・昨日は確か――――

私の裸を見てあまりの気持ち悪さ（実際は違う）に倒れて

魔術で転移も可能だけどお湯とかタオルを直していて完璧に面倒くさくなって・・・

ああ、放置したままか

私の部屋クーラーがんだから風邪ひいてないか？

まあ当麻だし大丈夫？かな

そういえば私は熱があつたが、もう大丈夫か？

体温計体温計・・・あつた

「人間って42度を以上が続くと死ぬと聞いたことがあるが・・・  
・41, 6はいいのか？」



昨日よりあがってる、なぜだ？

というよりは後0, 4度で死ぬな・・・どうしようか

[illegible][illegible]

あ、当麻起こして朝食を作らないといけないな（半ば現実逃避

結局私はおきた当麻から言われたとおりに病院に行くことになったが

めんどくさい、寝ようかな・・・

「いやゝ、40度超えなのにピンピンしてるねえ」

結局来てしまった、もう一度体温はかったら41, 9度だったときは真面目に驚いてしまった

そして今カエル顔・・・なんか美琴がすきそうな、あ、でもあれはアニメとかそういう類だからいいのか？

まあそんなやつが今日の前に居る

病院は何度もきていてこれが初めてのエンカウントというわけではないが・・・正直馴れないな

「昨日薬飲むのを忘れただろう？だから菌が入って熱が出たんだよ、薬飲んで寝てたらずぐに治るさ」

「む、そうか、じゃあ家で寝るとしよう」

いやはや、死ぬ危険性は無くてよかったよかった、でもまあ・・・魔術で直せるからなあ

自然回復がいいからなるべく使わないが

「ああ、それがいいね」

カエルも帰っていいといったし、家に帰って寝たねようか

と思っていたのだが・・・

「にゃ〜？」

病院からでてすぐ、黒猫と遭遇した

薄汚れてやせ細っていて・・・ずっとなにも食べてないことをあらわしていた

かわいそうだな、足もおぼつかないし

捕まえてミルクでも飲ませようとしたが・・・こいつ逃げる

しかも途中走ろうと思って盛大にこけてしまって顔面強打・・・  
いたい

「『猫、来い』」

『威厳』と言葉を組み合わせたスキルでとりあえず猫を抱いた、はじめからこれを使っておけば・・・

．．．．．それにしても

「ここは何処だ？」

首をかしげて周りを見てみた

学校があるのでとおりを歩いている人など居ない

まったく．．．学園都市は何処も同じように見えるから（双葉だけ）  
よく迷う．．．

「．．．とりあえず安静にしないといけないし寝よう」

私は薄暗い路地裏に入っていた

そしてひんやりした地面に座って意識を手放した

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
前にもこんなこと無かったか？

「ン……ふた……よオ」

誰かの声で私の目が覚めた……うるさいなまったく……

ゆっくりとまぶたを上げて私を起こした根源を見える

真っ白な髪、真っ白な服の中世的な細い少年が私の目の前にいた

久しいな……1年ぶりくらいか？

「……よオ、双葉ア」

しかしこんな形で会うとは思っていなかったな、なあ———

「『一方通行』<sup>アクセラレータ</sup>その口調は治らないのか？」



一方通行    S i d e

目が冷めて時計を見れば時間は9時過ぎ、  
しよおじき出歩くのはめ  
んどいがコーヒーがのみてエ

ンで外に出てみればだア

「ンで双葉がいンだよォ？」

路地裏で気持ちよさそうに寝ていたァ、『最強を超える最強さん』  
がいましたよォ

あァ？、今の声が大きかったみてェだなァ、おきやがった

「・・・よォ、双葉ァ」

「その口調は治らないのか、『アクセラレータ一方通行』」

この口調は一生直良ねえよ、つか男の癖に私つつてるほうが変だ  
ぞォ・・・まァ俺というよりわァしっくりはくるが

「つか、何でこんなとこでねてんだよォ？」

「病院にいつて熱があるから家で寝ていることにしたが、迷った」

「そんでエ、ここでねてるってかア？」

双葉はこくと頷いて肯定した

・・・こんな推定7，8歳の見た目少女がねてっとスキルアウトにさらわれるぞ？

まアロリコンはすくねえと思うがなア

「・・・・・・・・（ジ）」

「シだ、そんな熱い視線でエ」

「此処、何処？」

熱い視線はスルーですか？、ま、冗談通じねエのは知ってるけど  
なア

まゝた首をかしげて、そしてさらに上目遣いで言ってきたがったし

・・・可愛いと思った俺がおかしいのか？

まア暇だし、コーヒー買うついでだし送ってやろうか

「いくぞ」

「・・・（ジ）」

またまた、まゝたもや上目遣いの視線で見ってきた、  
つウかそれは反則だなア

「今度はなんだよオ？」

「疲れて動けん」

「.....」

.....まア双葉だしなア.....

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t

「ありがとう、助かった」

「あア、今度からは迷ンなよオ」

というわけで負ぶってもらって家に送ってもらった、意外と近くだったな

いやあ、一方通行は学園都市最強なのに優しいな（優しいのは双葉のみ）

人間みんな当麻や一方通行のように優しければいいものに・・・  
(後者は絶対争いの耐えない日々が続くだろう)

「じゃあ俺はいくぞオ」

「む、お前朝食は食べたか？」

私は食べていないし、良かったら食わないか？と補足説明も付け足しておいた

「ンア、まだだし食わせてもらうぞオ」

実を言うと一方通行は好きなんだよな天界の『あいつ』に似ていて・  
・  
・

**第十三話 虚空爆破（グラビトン事件には実は関係ない）（後書き）**

今回は一方通行と双葉の話ですねゝ

意外と一方通行が優しい・・・まあ双葉のみですけど、だってロリ  
ータだもん（大爆笑）



### 第十三・五話 超今更な1万ヒット記念的なにか

作者「いやゝさつき始めてアクセス解析見たけど1万こえてたw」

双葉「そういうのはこまめに見るものではないのか？」

作者「私はそういう時間が無いのです、主に惰眠をむさぼるので・  
・」

双葉「まあ惰眠ならしかたないな」

作者「まあ、今日はそれよりも一万ヒットの記念っ！、何かをしようっ！だらだらとっ！！」

双葉「……私もちらっとみたのだがな、2万と五千だったぞ？」

作者「ハハハ、ナンノコトヤラ」

双葉「……もうやめにしないか、眠い、というかこの企画をやろうとした理由を知っているからなおさらやる気がおきない（アクビしながら）」

作者「えゝ理由とは？（冷や汗）」

双葉「この先のアニメ（原作知識）を見てないから、だから私はグラビトン事件に介入しなかったのдар？」

作者「……………orz」

双葉「…………じゃあ私はもう寝る…………ふあ…………Z Z Z」

作者「ちくせう、作者さんはやることを見つからないでせうっ！、  
て作者は作者は言ってみる！！」

双葉 「Z  
Z  
Z  
Z  
Z  
Z  
Z  
Z  
Z  
Z  
Z」

作者「・・・はっ！！、この前授業中に書いていた双葉を見せようっ！！、いよっしゃー、ギリネタあったあー」

作者「ということなので←へGO!!」

作者「作者の絵のクオリティには突っ込まないでね（笑）」

あと下に書いてある秀吉っぽいのは気にしないで（笑）

右上の絵は魔眼100%開放バージョンです、ブラッククロックシューターみたいですになります

まあ人間の時には100%開放できませんけどw」

作者「後はあれですね、やること無いから『虚空爆破（グラビトン事件とは実は関係ない）』で使った魔術の説明をします」

『威厳』と言葉で聴覚から脳を操る程度の能力です

簡単に言うと言霊的なこと、もちろん人以外にも使えるしやり方を少し変えれば対象が無機物でも使用可能

『範囲指定』『現象』『結果どうなるか』と追加していけばいくほ

ど強力なったりより細かな使用が可能

後は補足説明を、双葉の空間移動の移動範囲は無いです、何処でもいけます、異世界でもいけます（笑）

それと此処重要、幻想殺しが効きませんw

まずはじめに美琴の電撃について『演算開始』↓『電撃を発生』したことによって『周りに影響（対象に攻撃）』という過程と結果があります、実際に言う過程はもっといっぱいありますが略します  
幻想殺しはその過程を消すものであって結果を消せるものじゃない  
はずです

確か小説か何かで『念動力そのものは消せるけど、その力で飛ばした瓦礫なんかは消せない』的な説明があったはずなので大方あって  
いると思います

あってなくても独自解釈という素敵な逃げ道もありますw

それで双葉の転移魔術は『世界を騙すこと』によって『元からそこに存在していた様にする』といった具合です

すなわち過程の時点で当麻は関われないので結果を消せない幻想殺しは効かないということです

しかも物体ではなく存在なので美事の電撃を飛ばしたのと同じく炎なんかも転移できますぜっ！

此処まで聞けば何それ最強じゃん、と思われるかもしれませんが黒子のように攻撃にはできません

転移先に何かが存在（原子や分子等の見えない物質を除く）していた場合はキャンセルされてその一番近くに転移されるからです

まあ宇宙空間に転移させれば即死ですけど・・・

それと普通の空間移動も使えますけどね、魔術で

でも座標移動よりも移動範囲は広い（というか無い）し人をきづつけることも無いのでこの魔術は双葉が気に入ってる設定で

以上、一万ヒットという名のなぞの番外編でしたー！！

すみませんっ！、もうやりませんっww！！

## 第十四話 虚空爆破（グラビトン事件には実はかn（r y

食事の最中、ふと気になった疑問を一方通行に尋ねる

「そういえば一方通行、学校はどおした？」

「めんどい」

おい、そんなこと言っているのか、まあ学園都市最強だからな・・・  
・いかなくてもいいものなのか？

158

でも超能力は使えないが魔術使えば勝てるんだけどなあ

だが私は争いたくないな、好きなやつを傷つけるのは嫌だし」

「おおい、声にでてンぞ？」

「む、すまん無意識で言ってたな」

まあすべて事実だし、一方通行も一年前のように『惨敗』は嫌だろうからな

なんせ秒殺だったし……

「そオいやア、双葉はまだ力のことを隠してンのかア？」

「まあな、色々と厄介だろう……第一にA I Mが観測されない力をみたら科学者からまた誘拐されてしまうだろう？」

「そオだな、————（ボソ）」

「？、何か言ったか？」



「いや、ンでもねエ、それじゃあ俺は帰るぞ……後飯うまかった」

「フフ、そういつてもらえると嬉しいな」

なぜだろうな、一方通行の前なら普通の笑顔ができるのは？

「……そうか」

でも私が笑顔でも、なぜお前は悲しい顔をするんだ

もしかしてまだ実験を……

そのまま一方通行は何も言わずに立ち上がり、私の前から消えようとした

あんな実験を見たこと・・・いや、その『相手』になった私だからこそわかる

一方通行は好きであんなことをしているんじゃない・・・はずだ

だから私は一方通行に声をかけようと立ち上がった

## 一方通行Side

「そオだな、．．．そんなときや俺が護ってやンよ（ボソ）」

「？、何か言ったか？」

自分で言ったけどくっせエ台詞だなア、おい

コレが俺の本心ってかア？ずいぶんとぬるくなつたなア．．．

「いや、ンでもねエ、それじゃあ俺は帰るぞ．．．後飯うまかつた」

「フフ、そういつてもらえると嬉しいな」

でもまあ・・・お前みたいな笑顔できるやつはア護りたいよなア・・・

「・・・そうか」

でも俺は実験中、護るとか言ってもし護れなかった時は無様だよなア

と思いながら双葉に背を向けて帰ろうとしたとき

『ドサッ』

ああ？、なんだ今の音はア、まるで倒れるような・・・ッ！！

振り向くと、そこには倒れた双葉がいた

さっきより顔が赤いのが見てわかるし、何より息が荒エ

そおいやア病院に行った帰りだとか言ってたなア

反射解除、とりあえず熱か？顔赤エし

とりあえずおでこの手を触れ、自分との体温の差を測る

・  
・  
・  
・  
・  
・  
あー、ンだ、すげエあんじゃねえか

まったく、俺に飯作るぐらいなら薬飲んで寝とけよ、馬鹿が

・  
・  
・  
・  
・  
・  
くそ、こんなの柄じゃねえけどなア

朦朧とした意識の中私は重いまぶたを開けると真っ赤な瞳が私を見ていた

「大丈夫かア？」

テーブルに肘をついてこちらを見る一方通行がいた

そして自分がベットに寝ていることに気がつくとき大体の状況がつかめた

きつと倒れた私を看病してくれたんだろうな

ありがとう、一方通行

「・・・すまん、迷惑をかけた」

む、ありがとうといおうと思ったのに・・・はあ、私の悪い癖だな、すぐ謝ってしまうな

「別にいいぜエ、前は俺が迷惑かけたしなア」

一方通行は苦笑いを浮かべながらそういった

フフ、確かにな、あの時は困ったぞ一方通行？

一年前

「ああ?!、今日の相手は女のがキじゃねエか?」

「餓鬼とは・・・一方通行、お前もソウじゃないのか?」

どうみても大人とはいえないし、何よりガキとか言う発言がガキな様な気もする

にしても白髪赤眼か、日本人は黒髪黒目じゃなかったか?

というか今女といったか? 言ったよな? 私はこれで何度間違われた



か・・・

「生意気なこといいやがつてエ、この三下がア!!」

といいながら地面を蹴る一方通行、うるさいやつだな・・・というか人間が出せる速度じゃないぞ、それ

やはり超能力者は卑怯といえるな・・・まあ魔術も卑怯になるな、何でもできるからな

とはいえ此処は研究所、下手に魔術を使うとまた何をされるかわからないし、何よりこれ以上体をいじられたら死ぬぞ

というか今まさに死ぬ寸前だな

グシャ、というべきか・・・私の腹に白い少年の拳が刺さった

内臓破裂したな、どうしようか・・・

「なんだア、手ごたえ無さすぎる、能力ぐらい使えつつうのオ！」

そういつて倒れた私はさらに蹴られて5、6mほどぶっ飛ばされた

いや、私は能力ないし、とツツコムべきか考えたが私には生憎そういう才能は無い

というか言おうと思っても血しかでないだろう

本当に死ぬな、いつそのこと魔術を全力で使って学園都市を滅ぼそうか・・・

まあできないことも無いが、面倒くさいな

『今回も力を使わなかったか、いつになったら見せてくれるんだい？』

いきなり広々とした研究室から機械を通した聞き覚えのある声が流れる

まったくうるさいマッドサイエンティストめ、早く私に興味をなくしてくれ

ほかの研究員はあきらめたというのに

「・・・ンだ、お前能力ねエのかア？」

白い少年は腕を組んで少し考えた後、倒れた私に声をかけた

「あ、あ・・・わた、しは・・・無い」

ところどころで血を吐きながら答えた

気分が遠のいていくのがわかる、タブン今ので出血多量確定だな

腹の肉がそがれているのにも気がついたし・・・

だから痛みが麻痺したんだな・・・なんかあっけないような人生だな

171

私はこの世界ではたして、満足な生き方が出来たのだろうか？

まあまあな世界だった、この考えが私の最後だと思いながら意識を手放した

一方通行 Side

くそ、くそ、くそがア！！

能力のねエやつを、ぶっ殺したじゃねエか、気分が悪ィ・・・

でも急いできた研究員はたぶん・・・あいつを死なせる気はねエだろうな

ならまた会える・・・かア？

「にしても、なんでLEVELLOが・・・」

『一方通行』

この声は確か・・・ああ、あのガキに興味持ってるやつか

ンだよ、俺に無能力者と戦わして・・・後でひねりつぶしてやろうかア>

『あの子はね、君をも超える可能性があるんだよ』

「っ！！、」

なんだとオ??・・・俺の能力よりも上っつうことだよなア？

だが、ならンで能力を使わなかった・・・しかも『可能性』っつうことは、あいつは能力を完全に扱えないっつうことかア

精神状態に異常がある？、いや、あんなこと言えるやつだ、たぶんねえな

何より腹をえぐった時もしやに冷静すぎたしなア、もしかしたら脳に直接的な異常があるとかかア？

「どういうことだ」

結局答えはわからねエ、氣にくわねねエが聞くしかねエな

『デュアルスキル多重能力、いや、あの子の場合は超能力というべきか・・・超能力以外の力を駆使している』

・・・なんだとオ？

『言っておくが嘘ではない、証拠の映像もみたし、何より・・・クク、あの子は普通の人間には見えない』

確かに、雰囲気はガキみたいのじゃなかったが、いやそれよりも何でもわかるような見透かされている感じもする

でもそれでも、A I Mが観測できねエのに能力を行使したのは引かかるなア

そういう力かもしくは・・・本当に能力が無いか・・・、でも映像って言うのも引かかるな

『だがしかし、あの子は7年間能力を使ってくれなくてね、それで今日死の危険を感じたら使うだろうと考えたわけだ』

・・・おおい、それでも使わなかったあいつはやっぱ能力がねエンじゃねえのかア？



確かに人間には危機が迫ったときに能力を無意識に使う人間もいるがア

俺の名前、（つっても本名は知らねエが）を知ってるなら能力も知ってるだろ

でもなア、あんな危険な状況で、つか俺相手に無能力者相手が生き残れるはずがねエのに使わなかったのには理由があるはず

この場合は能力が無いのがタブン確立が高エな

それに自分で能力がねエことも言ってたし、あれは嘘じゃねエ、たぶん事実だ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すでに研究員はマイクから離れたのか同じ声は聞こえなかった

くそが、  
気に入わねエ  
・  
・  
・

## 第十五話 一方通行（アクセラレータ）

——2週間後——

病室の一角、良くて小学生低学年、悪くて幼稚園児にも見える少女に目をやった

予想通り内臓がいくつかいかれてたみてェだけど此処の医者のおかげで命にかかわらねかった・・・か

「おい、大丈夫かア？」

「自分でやっておいて何を言う・・・」

確かなな・・・それになンでこんなとこに来てンだろうなア

ヒヤハ、人を心配するって、俺にもまだ人間味があつたみてエだなア

「・・・おめエ、能力持っていないんだろオ？」

「ああ、・・・持っていないのにあの馬鹿はもう何年も私の体をいじるし・・・はあ、いつになったらあきらめるんだろうかな・・・」

マッドサイエンティスト

そんな言葉を聴きながら俺は頭を下げて頬に手を当てながら口を開いた

なにせ今日はそれを言いに来たみてエなもんだからなア

「馬鹿はもう警備員アンチスキルが捕まえたぞオ」

ベットに横になっている少女は表情こそ変えないが目を少し大きくした

「・・・・・・・・・・・・・・・・、」

・・・沈黙か、まアそりゃア驚くよなア

「家どうしようか・・・」

かなり真剣な顔で言った

「ウおいつ！、もうこれからのこと考えてんのかよっ！！」

順応性が高すぎやがるぞっこのガキっ！

「ということだ、よろしく頼むぞ一方通行」

「あア！？、俺の家にすむってかア？！」

心配した俺は・・・・・・・・もういい、心配なんかしてねエ・・・

「ンで・・・まじできたんだなア？」

本っっ当にこいつはきやがった、つーか帰ってみたらリビングになぜかいやがった

かぎ、掛けたよなア？

「アンチスキル警備員に言ったらつれて着てくれたぞ」

「・・・心を読ンでんじゃねエ」

声に出てなかったよなア？

「まあ、明後日までには部屋は準備されるらしい」

でも俺のところじゃなくてもいいだろがア！、と一言言うと俺はもう無視することにしてベットに向かって寝転がった





「・・・・・・・・（穴があきそうなぐらいの超ガン見の視線（ジ  
ーーーー「うっぜっ！！！！」

「なんなんですかアそのあつつい視線は?!、うざってんだよ餓鬼  
がア!!」

「私も寝たいんだが・・・・・・・・ベット・・・・・・・・」

今度は俺から視線をはずしてベットに視線を向けた

「生憎、ベットはコレだけ、布団とかもねェんだよ」

ゴロンと寝返りを打ってガキを見ないように壁に顔を向けた

「(じーーーーーーーーーーーーーーーーー)」

・・・・ああ、視線のベクトル超反射してエ、一変味わって  
見やがれエ

残念なことにベクトル操作できないものがある、それが『視線』で  
ある

「もういい、このベット使え」

視線地獄から出て、とりあえずかわりにソファに向かう

「む、そんなところで寝るのか？」

「おめエのせいじゃねえかつ!!」

「体に悪い、ベットで……一緒に寝るか？」

「ブッ、おめエ幼女と寝れるか!!」

でもまあロリコンなら喜んで飛び込みそうだが

こいつ、つか名前は何だア？

「む、そういえば自己紹介をしていなかったな、私は綾瀬双葉・・・  
それと14歳の男だ」

心を読めるのか、と思った瞬間俺の中で沈黙が続いた

・・・・・・十四歳の男だア??

一方通行確認中

長いまつげにつやのある束ねた長い髪

少し死んだような目をしているが普通にしていればパツチリした可

愛さのある瞳

胸は女子にしては小さいが男より膨らんでいる、体も全体的にふにしているっぽい

全体的に見ると120cmそこその少女、もとい幼女

以上を踏まえた結果

「幻聴かア・・・寝たら治るだろなア」

とりあえず気のせいだ、もう考えないぞ・・・

一方通行      s i d e      o u t

「まったく、先に寝るとはな．．．」

ソファに寝そべった一方通行をみるとすでに寝息を立てて眠りについている

まるで現実逃避のようだな（↑そうですよ

一方通行にはあの地獄（本当の地獄はあの程度ではないが）から開放してくれたのだ、感謝ぐらいしたいし、何より・・・『アイツ』に似ている

瞳を瞑り、天界での出来事を思い出す

乱暴で危険好きな変わった性格だが、根はものすごく優しく、誰かのためになら死んでもいい考えのもちぬし、そして白髪赤目で容姿も似ている

偶然だろうがアイツに似ている・・・似すぎている



「だから……お前に会えてよかった……」

私は一方通行の上に乗って顔と顔を近づける

常時している反射のおかげで一方通行は目がさめることは無かった

「私の力、見せてあげよう」

おでことおでこをぶつけて私は意識を手放した

追記、 反射の性でかなり痛かった・・・

一方通行Side

「ここは何処だア？」

目を開けてみれば、いつのまにか真っ白な空間にいた

そしてポツンと、真っ白な空間に似合わない物体が目の前にあった

「・・・双葉ア、なにしゃがった」

こいつ、能力あるじゃねェか・・・にしても意味わかんねェ能力だな

「夢の世界につれてきた、というところだな」

俺が口を閉じると同時に双葉が返答した

つうことはコレが双葉の能力か？

精神系か？・・・でもこんなの見たことないし新しい能力・・・まさか原石k「違う」

ああ、そりゃあどういうことだよ・・・つうかお前は心を読む達人か？！

「コレが私の能力というのには間違いは無い、ただし条件は触れる、もしくは目線を合わせる必要がある・・・それと思考が読めるのは目を合わせたからだ」

なるほどねエ、意思疎通とかの類か？

「いいや、これはあくまで力の一片でしかないぞ？」

「そォいや・・超能力以外の力だったかァ？」

あの研究員の話はどうやら本当だった見てェだな・・・なんだか罨にはめられたような気分だな

「む、罨とはひどいな・・私は『能力』をもっていないといったのに、『力』を持っていないとは言っていない」

むかつくことに覚えている、確かに言ってた・・・

「にしてもこんな力があるのなら、簡単にアイツを殺せたんじゃないか？」

「確かに可能だ、でも殺しはダメだから行動には移さなかった、だから今の今まで待ち続けたわけだ・・・」

・・・

俺はその言葉に対して何も言わなかった

いや、いえなかったというのが正しいだろうなア、まさかこんなことを考えるやつがいるとは

『人を殺すなら自分を殺す』、か？

優しい、優しすぎる、『不気味』なほどに優しすぎる

なんだよ、まるで『罪』を償うみたいに・・・

「・・・・・・・・罪を償うか・・・・・・・・」

そーいやアわかるんだっけかア？、視線を合わせたら心を読めるとか・・・・・・・・戦闘にどれだけ有利なんだよ・・・・・・・・

と思いつつ双葉の視線からはずす

「そうだな、所詮私のは偽善でしかない・・・・犯した罪は消えることは無い・・・・・・・・」

ギリギリ聞こえる声で双葉はつぶやいた

そんな言葉を使うとか……ンだよ、お前もかよ……

お前も罪を背負ったのかよオ？

「私はどうすればいいと思う？」

視線をはずした隙に双葉は目の前に一瞬で迫っていた

若干上目遣いで俺を見上げている、普通の状況なら可愛いと思うだろう



漆黒の瞳はそこさえわからぬ底なしの沼のようににごって暗かった

こんな状況じゃなければ可愛い表情だが、今、俺がそこから感じたのは、はじめて感じた――

「っ!!」

――恐怖だった

とっさに右腕を上げて双葉に振り下ろした

能力は発動しているみたいなので即死につながると思いつつも

しかし、振り下ろされた右腕は双葉の寸前のところで止まっていた

ドサと糸を切られた人形のように一方通行は地に伏せた

泣いていた。嘆いていた

目を覚まして俺が見たのは床に座って無表情で瞳から大粒の雫をこぼす双葉だった

私は・・・私は、と嘆く双葉を俺は暫く無言で眺めていた

「すまない、すまない。」

手の甲で何度も何度も目をこすり続けて、双葉の目とその周りは赤く染まっていた

「・・・・・・どうしてそんなに泣いてんだア？」

涙を流す理由がわからず聞く

いや、本当はわかってるがこいつ自身の口から本当かどうかを聞きたかった

「私は、私は・・・礼を言おうと・・・夢に入ったのだが・・・  
・怒って一瞬、殺そうと・・・してしまった・・・」

途切れ途切れにそういった

ああ、あれか、と俺は夢の中でされたことを思い出す

強制的に意識をきられた力からすると脳に直接影響を与えるものだろうオ

それが強力になれば脳を狂わせて殺すことも可能だろう

「それで泣いてるのかア？」

コクンと双葉は頷いた

「・・・俺は生憎最強でなア」

そう言いながら横に寝転がる体勢から立ち上がり双葉に向かって続けた

「臨死体験をしたことは無いが、いつも普通のやつからしたら死ぬ立場におかれてんだよオ」

双葉に近づきながらそう声に力を入れて放った

「・・・・・・・・」

いまだに瞳からは涙が流れているが、少しはましになっていた

そして双葉の目の前まで行くとしゃがんで頭をつかんだ

「おめエが何したとかは俺はしらねエがア、罪は償うもンじゃね、

背負うもんだ・・・そんで生きてくんじゃねえか？」

あー、あーあ、慰めの言葉なんだけど俺が言える立場じゃねえつつ  
ウの、馬鹿みてェだな

でもコイツは・・・双葉はなんだろうな・・・『普通』とちげェん  
だよな・・・

「わかったら寝ろ」

といいながら一刻も早く逃げ出したい俺は立ち上がろうとした

あくまでもしようとした。

「ンだよ・・・」

服の袖を双葉がつかんでいたのでその行動はできなかった

「その、一緒に・・・寝ないか？」

「・・・勝手にしろ」

断れねエじゃねエかよ、こんな状況じゃア

それと思わぬ一言だがやっぱりガキだ、子供だ、小学校低学年だな  
ア(遠い目)



・・・それと俺はロリコンじゃないぞ？

その後、ベットにて

反射は解いた。何でかってエ？

危ないからだよ（↑超優しい一言じゃん）

「一方通行、ありがとう」

とかいって抱きついてきたのもある・・・

それと大事なことからもう一度言う、俺はロリコン（ry

そこで略したら俺がロリコンみてエじゃねえか！！

まあそんな間違えするやつはいねえだろうなア？

つうか事実上はシヨタじゃねえか？

**第十五話 一方通行（アクセラレータ）（後書き）**

一歩通行がやさしいいいいいいい！！

ていうか恋愛フラグがあああああ！！

まあいいや（笑）双葉さんに性別関係ないしっw

## 第十六話 幻想御手（レベルアップ！）

「あつイ・・・・・・・・」

全く、今日は終業式だったか？、そんな日なのにやる気が出ないとは・・・・・・・・

人間になって15年という短い間だが、精神も弱くなったものだな

まあ、人間らしくなってきたという証拠ということか？

「はぁ~~~~~」

「ところで当麻はなぜそんなに疲れているのだ？」

正直目障り、私が歩くのが面倒くさいのはその疲れた顔が視界に入るのが2割がたあるぞ

「いや、昨日は爆発とかビリビリとかがあって・・・」

うぬ、普通の高校生とはかけ離れている当麻はおいておこう。

「ちょ、双葉さんっ、その哀れな目はなにっ!? いや確かに俺惨めかもしれないけど!!」

「・・・自分で言っていて傷つかないのか？」

「・・・・・・・・orz」

知ってるか、アスファルトで火傷することもあるんだぞ・・・・・・・・  
あ、熱そうにしてはねた

ビッタンビッタンと魚が跳ねる音に似ている音を立てながら・・・・・・・・  
おお、すごい

まあそれもおいといて今日は

「あつい・・・・・・・・」

この台詞最近ずっと言ってるような気がするのだが・・・・・・・・

くくく色々なことがあり夜になっちゃったりする（別に書くのが面倒くさくなったわけじゃ無いんだからねっ！！くくく）

「当麻。」

「ああ。」

当麻と一緒に久しぶりにファミレスにきたまではいいのだが

なんで美琴が男に……ナンパ（正確な意味は知らないが）をしてるのだ??

しかも私たちといったときのような感じではない、というか普段の美琴を見ている人ならわかるだろうが……

「気色悪うっ!!」

当麻の言うとおりで違和感がものすごくある



というか塊？違和感の

「まあ何か理由があってやっているんだろし、大丈夫だろう」

美琴が何をいわれているか知らないが、此処から見れば拳を震わせているのがわかる

演技だな、迫真の

「・・・」

「当麻？」

何じっとみているんだ、大丈夫といったのに心配なのか？

あの美琴なのだ、イザという時は怪我一つしないであやつら不良を倒すだろ

「助けに言ってくる、主に不良を」

「・・・・・・・・・・・・・・・・把握した。」

ソウだな、美琴が怪我をしない代わりに不良が怪我するな

私はせっかくご飯を頼んだのだ、食べよう

あ、今日は当麻のおごりで財布を持ってきて・・・（財布確認中）  
・  
・  
・ 無いよな

当麻・・・不良がさつきより増えてなんか近寄りづらい雰囲気  
が・・・あ、逃げた・・・

「・・・馬鹿」

私でも愚痴は言う。・・・ことわざみたいになったな

黒子 SIDE

「はっ、いつの間に黒子はトリップを!!」

黒子としたことがお姉さまのあまりの激変振りをみて・・・ああ、お姉さまあゝ可愛かったですのお

さて、その麗しのお姉さまは・・・って、お姉さまがいない

っ！！

ま、まままままままさか！、あの後不良共と本当にいけないことを  
っ！！

あんのクソスキルアウトォ！！許しませんの！！」

「いや、当麻が介入してどっかいったぞ？」

「へ、あ、双葉さん？」

いつの間にかパフェを食べている双葉さんが目の前にいて、  
というか私の心を読みましたのっ！？

「声に出ていたぞ？（パクパク）」

「ああ、そうですか・・・・・・・・って今のは声に出してませんでしたのよっ?!」

「心を読んだ（モキュモキュ）」

もういいですよ、ツツコミは止めましょう・・・・・・・・

「ところで黒子、何をしていたんだ？美琴があんなことをするとは思えないからな」

「それは・・・」

幻想御手のことを話してもいいのでしょうか・・・ですが双葉さんの頭脳はとても良いと聞きましたし何か手がかりが・・・

それにお姉さまがあんなにデレデレになるほどのお方ですので、信用は必ずできるはずですし聞いてみましょうか

「幻想御手という使用すればLEVELがあがるというものを探していますの、それであるスキルアウトが持っている可能性があるの調査ですわね」

「幻想御手・・・ああ、あの曲か・・・」

スプーンを口にくわえて少し考えるそぶりをした後思い出したように言った

やはり手がかりは知らな・・・・・・・・えゝあの曲かつて・

「知ってますの!？」

バンッと机を叩いたことによって机に並んでいたものが少し浮いた

「さっきから声が大きい、自重しろ」

その半分は貴方の言葉の性ですの・・・・・・・・、まあ周りからの視線が痛いので気をつけましょう



「そ、それよりも知っていることがあれば教えてほしいのですけど」

「わかった、幻想御手の元は私が研究所にいたところに作られていたものだ。確か2年前で、その時は研究にいきずまってあきらめていたのだから、実験の関係者が再開したのだろ。にしてもなぜこんなことを？」

あなたのいた研究所は一体どんなところでしょうか、黒子はきになりますの・・・

「最近それを使って能力を上げている輩がいるんですの、昨日もその事件があって「あれを人が使用したのか？」そうですよ、まったく・・・」

「直接聞いたわけではないがあれは元々能力を上げるためのものじゃない・・・何より使用した場合は副作用が発生するはずだ」

「副作用ですよ?!、まあ確かにあれはすごいものであったもおかしくは・・・それでその副作用は?」

「2年前までは確か・・・脳がやられて全身麻痺になっている、一応失敗作だから完成品は悪くてずっとでも全身麻痺どまり、良くて一時的なものだろうな・・・」

そんな、まさかあのグラビトン事件の犯人は・・・・・・・・はっ!、なら直し方は!

「な、直す方法やせめての対処法はわかりますの?」

「すまない・・・知らない・・・・・・・・」

当然でしょうか・・・しかし副作用があるとはかなり危険なもので・・・かといって副作用のことを使用者に言えば、ああもうどうすれ  
ばっ！！

「でも幻想御手があれば直せるかもしれないぞ？」

「っ本当ですよ！」

これは希望が見えてきましたわね、なら一刻も早く幻想御手を手に  
入れなければ！

## 余談

「黒子、当<sup>サイフ</sup>麻がどっかにいったから出してくれないか？ 今度返すから」

「それはお話の報酬としておごらせていただきますわ」

## 第十七話 幻想御手（レベルアップから脱線した）

「『同調』」  
リンク

そう言いながら私はパソコンをさわり、そのままとまることなく私の手は手首まで画面に入っていく

そして目を閉じて意識を集中・・・

刹那莫大な情報量が脳に進入してきて邪魔なもののははじき、ほしいものだけを選別する

私が調べるのは唯一つ、幻想御手の情報もしくは本体

さらに集中して少ない情報をたどりつつ幻想御手のデータにたどり着く

どこかのサイトのか？

破損データとなっているからばれないうちに消したのか、意味ない  
というのに

それよりも今は復元しなければな．．．足りない部分を修復して  
統合．．．完了

さてと、ついでに情報源をさがして誰が作ったのか探ってみようか

まあ心当たりはあるのだが．．．確かあの学者がものすごく興味があ  
ったから．．．

念のためにもっと深くもぐるか．．．

『ぎゃアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！』

「Σニヤアッ！！」

ビクウ、と私のひざの上で寝ていた猫が毛を逆立てながら起き上がった

当麻の声か・・・猫が怖がるからやめてほしいな、というか幻想御手の情報は手に入れたし昨日勝手に逃げたことを問い詰めよう、そ

うしよう

パソコンから文字通り手を抜くと、私は当麻の声に驚き全身の毛を逆立てた猫を抱えながら立ち上がる

……ついでに朝ごはんに誘おう、おなか減った

「……すまん」



といいながら私はトビラを閉めた

まさか当麻に彼女がいるとは思わなかった（↑通りすがりのインデックス）

それに裸ということは何かしらの行為の最中だということだよな、いやはや失礼したな

「ふうたあばすわあーん、誤解をしないっ！」

何か聞こえるが幻聴だな、そうだな、きっと彼女も気のせいだあの不幸体質d「それひどくないかっ!!」

「む、声に出てたか？」

いつの間にか玄関に出てきた当麻にツッコまれた

「バリバリに」

最近無意識に言うことが多いな、まあ人間らしいのか・・・な？

「ところで当麻、あの女はなんだ？」

といいながら当麻の後ろにいる布団に包まった少女を指差す

なぜこんなところに女がいるのだ、やはり彼女説は正しいのか？

「・・・なんかベランダに干されてた」

「意味がわからん」

いきなり意味不明な発言するとは・・・とうとう頭もやられたのか？

「朝起きたら文字どおり干されてたんですよっ！！ベランダにつ！！」

うーぬ・・・まあ冗談と思いたいがここは学園都市、何があっても不思議ではないな・・・

「くっそー、朝から不幸の連続・・・って、ああ！！補修！！」

「当麻は補修なのか？じゃあ、あの白い女を見ておこうか？」

それにあの少女に聞きたいことが少しばかりあるしな・・・

その後当麻が土下座してありがとうございます双葉様といいながら部屋をでていった

その際携帯を落としてさらに踏んだのは余談だ

「モキュモキュ」

よく食うな、私の冷蔵庫の中に一週間分くらいあったのにもう無いぞ・・・

にしてもシスターだったのか・・・まあある意味『予想の範疇』だな

「ぷはー、おいしかったんだよ！」

「そうか・・・それは嬉しいな」

・・・私の財布は悲しいことになるだろうがな

「ところで、ベランダに干されていたんだろう・・・どうしてそうなった？」

「とんだんだよ、むこうの屋上から」

「・・・よく死ななかったな」

まあなぜ死ななかったのかは予想がつくが

「この修道服はね、歩く教会って言って法王級の攻撃も防ぐんだよ！」

そのことを普通の人間に言うのと狂った人間に思われるぞ？

・・・それにより『魔術』・・・か

この少女から魔力のにおいがするのは気のせいじゃ・・・いや、少女そのものではなくて、掛けられている術式のものというほうが正確か

「にしてもその歩く教会は壊れているのじゃないか？」

「そうそう、あのツンツンが．．．あれ、私壊れてるなんか  
私も魔術師、そのくらいわかる」ッ!」

ふむ、この世界にもやはり魔術師がいたのか

この学園都市では暮らしにくいからその魔術の国にでもいきたいな

学園都市にはトラウマしかないし．．．

「わ、私になんのように？」



「??、お前に用なんて無い、第一私は自分以外の魔術師にあったのは今がはじめて・・・いや、魔術というものが本当にあったのをはじめて知ったしな」

魔力があるのは感じていたがそれで必ずしも魔術、または魔法があるとは限らないしな

「へ・・・?魔術のこと知らないのに魔術師?」

む、ああ、確かに言い方が悪かったな・・・しかし天界の魔術とはいえないしな

「まあ・・・成り行きで魔術師になったというところだ?」

とりあえず首をかしげながら言っでごまかした

「疑問で言われたらわからないかも」

いや、確かにそうなんだが・・・天界と言ってもな・・・それに  
天界と知ったら魔術側からも研究されそうだ・・・

「・・・それで、敵にでも追われていたのか、飛んでまで逃げた  
いような？」

「・・・うん」

・・・さて、私は人間になってから甘くなってしまったからな・

・  
・

こんな年端もいかない少女を見捨てることなどできない・・・はあ

こまったものだな、私の性格は？

## 第十八話 助言（アドバイス）

結論だけ言おう、私は少女を助けられなかった

私が「私がお前を護ろう」といって返ってきたのは「……だめ、貴方には関係ない」といわれた

その後数回言葉を交えた後、少女は去って言った

そこまでなら私も追うことも出来た、いや、魔術を使えば探して捕獲することも簡単だ

しかし私の頭の中では少女……そういえば名前を聞く前にどこかへ行ったな……

その少女が最後に、別れ際に言った言葉『一緒に地獄に来てくれる？』……だ

比喩なのは重々わかっている、それに人間が考えるほど地獄は苦しいものではない

しかし、彼女のいった一言は、その一文字一文字にある心がこめられていた

私のような・いや、私は魔術師だが・見ず知らずの人間を巻き込みたくは無いだろう

当麻なら走って追いかけるかもしれないが生憎私はそのようなことはできない

ちなみに走ったらこけるからではない

・  
・  
・  
・  
・  
・  
昔を、思い出してしまった・  
・  
・  
・

私は唯たすけたかったただけなのだが、『アイツ』はそんな事を望んではいなかった

あの時と同じ過ちを犯したくは無い

・・・悪魔と言えども、私の心は人間より弱いな・・・

そっと、私の頬に暖かいものが伝わる

それは少女を追わなかった後悔か、昔を思い出したからかは私自身にもわからなかった

「君は何でそんな顔をしてるのかい？」

私は薬をもらいに病院にきたら、カエル顔の医者に声をかけられた



「そんな顔・・・か・・・」

時刻はすでに4時をすぎている

もう何時間もたっているのに朝の少女を忘れられない

心配とは違う何かが私の心を締め付ける

「僕に君の悩みはわからないがね、悩みって言うのは自分ひとりで解決するものじゃないと思うよ？」

・ ・ ・ ・ ・ 確かにそうだな ・ ・ ・ 共に悩める仲間がいて、共に解決しえる仲間が必要だ ・ ・ ・

しかしな、朝聞いた話によると魔術は一般常識じゃない

ましてや科学の町に魔術のようにオカルトとして分類されるものがあつてはならないはずだ

私は例外として、彼女のことを相談できるようなものはこの街には、私の知る限りはいない

「ふむ、どうやら言えないことらしいねえ・・・ならこういうのは  
どうだい」

医者言葉を聴いて、今まで下を向いていた顔を少しあげ上目で見  
上げる

彼は口を開いて、こういった

「迷ったら走れ、青春っぽくていいじゃないか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・私は走れないのだが？」

「ようやくしゃべったね、まあそれは言葉のあやで、迷ったら何もしないじゃなくて、自分が思ったように行動するっていうことかな？」

迷ったら走れ・・・か

・・・そうだな、私は何を迷っているのだ

走れば、私が信じる道を進めばいいのだ

まさか人間にアドバイスを・・・いや、人間こそその観点といったところか、タメになったな

私は座っていたイスから立ち上がり、病院の外へと向かった

「走ったら危ないよ・・・あ、こけたね」

・・・痛い



## 第十九話 魔術師（ステイルⅡマグヌス）

どこだ、あの少女は？

魔眼を発動しても、発見できないとはおかしいな．．．．．  
とは、魔術による認識阻害か

ならその妨害魔術を探して、透かして見るか

魔眼発動．．．．．範囲―学園都市全域＋外の付近の区域．．．．．  
検索―認識阻害魔術、無い場合はなんでも魔術なら

．．．．．発見、寮のところで襲われてっ！！

私が少女を発見したと同時に、彼女は長身の女に背中を切られていた

背中から鮮血が吹き出て、彼女は倒れる

暫く呆然としていた、しかしちゃんと頭の中では回復用の魔術を組み立てながら、転移の魔術を発動している

シュン、と私の姿が消えた



『バギン!』

私の姿は寮ではなく、その500mほど手前の路地で現れた

魔術妨害？・・・いや、それにしては魔力を感じられないし・・・  
いや、そもそも此処らへん一帯は魔力がやけに・・・薄い？

まるで『根こそぎ』魔力をブン捕っているようだ・・・しかも通過  
点を強引に邪魔された

くそ、これなら普通の空間転移ではなく、私の座標誤認をしたほう  
がよかったな

再び拳を握り、そして私はもう一度飛んだ

「おい、どうしたっ！おいっ！」

目の前には当麻がいて、少女にのしかかるドラム缶型の機械をのけていた。

「当麻っ！」

「あ、ふ、双葉・・・こいつ、こいつ血が・・・！！！」

あまり人の前で魔術を使うのは気がひけるが、そんな事を言ってる場合じゃないな

さっき回復用の魔術も妨害一緒にされたからな、もう一度組み立てなおさなければ・・・

1秒もかからずに術式は完成し、発動した――――

『パシユウ』

が、途中で強制中断していしまう

なん・・・だと？

「何だ今の？」

といいながら当麻は自分の右手を見た

・・・ここにも妨害の魔術が？

しかし、妨害魔術の感じはしないし・・・？・・・いや、  
そもそもここら一体の魔力が・・・無い？

どういうことだ、インデックスといわれた少女の周りの魔力が、全く無いだと？

・・・魔眼発動、私に『原因』を見せろ

「・・・・・・・・当麻。」

「え、あ？」

「その右手はなんだ」

私は当麻の右手を指して、少し、いつもよりきつめの口調で言った

なぜお前がその『右手』を持っている・・・

「これは幻想殺し（イマジンプレイカー）って超能力を消す力が・  
・って、今は説明とかしてなくて早くたすけないとっ！、誰がこんなことっ」

幻想殺し・・・・そんなちっぽけなわけが無いだろなにせその右手  
は――――

「うん？ 僕達『魔術師』だけど？」

当麻の質問に答えるよう、私の背後から声が放たれた

次から次へと、今日はなんなんだ・・・・科学の町で魔術師に何度も  
遭遇するとは

振り返り、声の元に目を向けるとそこには赤い髪でタバコをくわえた長身の子供がいた

子供の神父とはっても身長は2m、格好は神父の格好をしているが指輪や毒々しいピアス、香水もつけて子供、ましてや神父とは到底思えない

「当麻、そいつを連れて逃げろ・あいつはそいつを追っていたやつだ」

すぐさま私は当麻に言う、がどういふ返答がくるかはわかってい

「なに言っただよ?! どういうやつかわかんねえのに、双葉を置いていけるわけねえだろっ!」



当麻のような善人は、こういうときだけは厄介だ・・・

遠まわしに邪魔、といっているのがわからないのか・・・

「どういうやつかって言うとな魔術師だよ、さっきも言っただろう？  
それと早く回収したいんだよ」

「かい・・・しゅう？」

「そうそう、回収。まあ正確にはソレの持ってる10万3000冊  
の魔導者だよ」

一瞬視線をはずして少女をみるがどこに魔導書は無い・・・という

ことは魔術で隠しているか、何かの暗号か？

というより早く当麻、逃げてくれ、できる限り学園都市の人間に魔術を見られたくは無い……. . . . .

「……すまないが、強制終了させてもらう」

私の言葉を最後に、私と当麻と少女、それから赤髪の神父の姿は寮から消えた

ステイル視点

どういうことだ?!、いつの間にどこかの空き地にきたんだ？

そして目の前にはさっきの幼い子供がいる

これは・・・非常にまずい、早くあの子を回収しなければ死んでしまう

いや、死ぬのは心配じゃないな、病院もあるし・・・しかしだ、魔術サイドのことが科学サイドに知られてしまったら最悪だ

……だが、今最優先なのは目の前の子供だ

「……そういえば超能力者っていうものがあるんだっただね……」

平然を装い、僕は言った

いくら子供といえども、空間移動なんてやりにくい相手だったら……  
・分が悪い

さっきの寮にルーンはほとんどはってきたし、これじゃあもしかしたら負ける……

「『危害を加えるな』……私は超能力者じゃない……ど  
つちかというと魔術師だな」

魔術師か……しかし最初の一言はなんだ？ 話し合おうということ  
か？

それに魔術師ならまだ未知の領域じゃないからいいものの……  
後の問題は『いつ魔術を使ったか』が問題だね

魔術を使うそぶりなんかしなかったのに……、それにどっちか  
というと、といていたし魔術師の存在を知っているし、普通の魔  
術とは違うのかもしれない、というかそうだろうね

「そうだ、私が使うのは想像を超えるものだぞ？」

やはりそうか・・・・・・・・・・・・・・・・。。い  
やまて今なんていった？

僕は声に出してなんか「勝手に思考をよんでいる、何を考えても無駄だぞ？」またいつの間にか魔術を使っていたのか、くそコレじゃあ本当に危害を加えられないね、なにせその前に魔術で迎撃されるだろうし

「賢明な判断だ」

「ありがとうといっとう・・・・・それと君は本当に魔術師か？、魔術の準備なんてしていないし、詠唱もしていないじゃないか？」

「敵にそんな事を教えるつもりは無い、じゃあ此処からは私の独壇場だ『質問に答えてもらおう』なぜあの少女を狙う？」

「それはさっきも言ったとおり回収、正確にはあの子の――Index librorum prohibitorumの完全記憶能力で記憶した10万3000冊の魔道書の回収・・・回収目的はあの子の10万3000冊の魔道書で脳を圧迫死されないように記憶を消すため」

な、なんだっ、言おうとも思っていないのになぜか口が!?!? コレも魔術なのか?!?!

「ふむ、わかった・・・インデックスの件は私がやっておく、だから・・・消えろ」

「な、巨人に苦痛の贈り物を(PurisaZNaupizGed  
o)!!!!」

手を翳して何かをしようとした子供に、すぐさま魔術を放とうとするが――――

「なぜ魔術が発動しないっ!？」

「最初に言っただろう、『危害を加えるな』と・・・」

魔術は不発、戸惑いでよくわからない間に僕の意識は闇に落ちた



## 第十九話 魔術師（ステイルⅡマグヌス）（後書き）

双葉さんチーーーーーッ！

というか原作早速H O ☆ U ☆ K A ☆ I ミ ☆（キラント

いやはや、『<sup>カリスマ</sup>威厳』の応用技まじ書いてて半端ねえっすね（笑）

まあ幻想殺し聞かない座標誤認もつよいっすけど、ていうかコレだけで大体の相手に勝てるんじゃないのか？

というか存在をどっかにやれる時点で周りの全人類を宇宙空間にパ  
ーと飛ばしちやえばいいんですよええ、そうですともW

第十九、五話 またやりましたよ5万記念

すみません、またやりました

.....で、書くことはありませんW

双葉「...馬鹿？」

作者「.....orz（ズ~~~~ン）」

双葉「・・・・・・・・」

作者「・・・・・・・・orz（シクシク）」

双葉「・・・・・・・・すまぬ読者、左上の左向きの矢印をクリックしてくれ、もしくは右上の×を」

作者「ちょ、作者をカバーしてよっ！何か私の代わりにしてくれよっ!?!」

双葉「うるさい、自業自得、責任を私に負わせるな、というより何もすること無いならやるなクズ」

作者「あれっ?!馬鹿よりひどくなってないかつ!」

双葉「・・・気のせいだ・・・ゴミ(ボソ)」

作者「聞こえています♪」

??? 「ふ・た・ねえ~~~~~!! (双葉に抱きつく、  
うよりタツクル」

双葉「ひぐっ (軽くぶっ飛ぶ」

作者「注」小学生低学年並みの身長の人には飛び掛らないでね、  
危険だよ♪」

双葉「なぜ美琴が…… (抱きつかれ中」

作者「え、なんか罵倒されるのが悔しいから作者の力使ってみた」

双葉「・・・・・・・・・・（この間にも美琴により抱きつかれ&撫でられ中」

作者「そう、双葉さんは美琴ちゃんに弱いn「さっきからうっさい！！（ビリビリ」ギィニャーーーー！！！」」

双葉「・・・・・・・・・・ゴミではなく灰か・・・（作者まだ灰ではありません」

美琴「これでやっと一人きり・・・知られてはいけないあんなこともこんなことも・・・グヘヘ」

双葉「・・・・・・・・ダッ、ボタン（逃げる。が、こけて失敗）」

美琴「ふふ、ふたねえ〜逃げても無駄よ〜（ジリジリ近づくのって怖いよね（笑）」

双葉「・・・・・・・・（魔術、使おうかな。と考え中」

美琴「ふったねえ♪（本日二度目の飛び込み、もといルパンジャンプ）」

???「御坂ちゃアアアアアああン!!（おっと、ここで邪魔が入ったあああ!!）」

美琴「へぶしっ（数十mぶつとぶ、もちろん主人公補正で死にません）」

双葉「すまない一方通行、助かった（服がはだけてちょっとやらしくなっています）」



一方「・・・・・・・・・・双葉ア」

双葉「？（首をかしげてめっちゃくちゃかわいらしく見えます）」

一方「誘ってんだよなア（違います）」

双葉「誘・・・？？」（おっと意味がわかってなかった、これでは一方通行さんもあきらめ—————」

一方「ジュルリ（ああ、そういえばロリコンだったね）」

美琴「ちよつとまちなさいよっ！ふたねえは私のものよ（超電磁砲撃つ）」

一方「あア？！誰のモンでもねエだろオが。それにしいて言えば俺だアー！！（反射。てかしくて言えばってW W W）」

美琴「グチャ（私の口からは……いえません……ですか主人公補（r y）」

一方「じゃあ犯るかア……（誤字じゃないよ♪）」

双葉「・・・・・・・・一方通行（お、なんだなんだ？）」

一方「なんだア？」

双葉「お前のこと嫌いになった（ですよねw）」

一方「・・・・・・・・（やはりロリコン、落ち込み度が・・・・  
って、その笑い怖っ！？なに、それは怒りか何かの表れなのっ！？  
怖っ！？」

双葉「……でも今日は一緒に寝よう……そうしたら好きだ（もちろん not 愛してるだよ）」

一方「……あア（は、はじめてみた……まさか一方通行<sup>コソ</sup>がこんなすばらしい笑顔を見せるとはっ」

双葉「ああ、その前にやることがある、手伝ってくれないか？（いや、でも一緒に寝るのって完全に誘ってるよね……って、やることって何だ？」

双葉「邪魔↓（……え、まじっすか！？自分の存在邪魔っすか?!」

一方「だオだなァ・・・人のことをロリコン呼ばわりしといてエ（すみませんすみません、地の文のバイト始めて日が朝浅いっすからどうかお許し・・・てちょ、あ、ぎゃあああああああああ！」

双葉（地の文ってバイトあるんだ・・・）



## 第二十話 悪魔（デビル）

・・・此処は何処だ？

気がついたら、学園都市のどこかに私は立っていた

時間は太陽の位置から考えると夕方の学生がかえるころなのだが・  
・誰もいない、それどころか気配もなにも感じない

286

「『魔眼』発動―検索人間・・・・発動失敗・・・チッ（ボソ）」

さっきの魔術師との戦いで魔力が尽きたか？・・・しかも魔力で強化していた演算能力も消えてる・・・

私はもう一度舌打ちをして学園都市を歩き出した

・  
・  
・  
・  
・  
歩くのは嫌だ



???.Side

双葉がおきた同刻、人のいなくなった学園都市のビルの屋上に男は立っていた

「さて・・・やっと『死んだ』か、まあ人のために魔術を使うのは予想どおりだな・・・」

とつぶやいて右手を横に振りシュバ、と空間が裂ける

そして男は吸い込まれるようにその空間に入っていった

しかしここは本当に学園都市なのか・・・誰もいないのはおかしいし、というよりコレは魔術か超能力関係だろ・・・まったく誰がこんなことするのだ

だがソレはひとまず置いておいて・・・

「・・・・・・・・つかれた・・・・・・・・」

やはりこの体は不便、1 k mも歩いてないのにもう歩けそうに無い・  
・

と休憩でもしようと近くのベンチに向かったその時、背後からとんでもない威圧感を感じた

振り返ればベキバキ、と空間がわれ、白や黒の、空間を壊した時に

起きる現象の『隙間』が顔をのぞかせている

この魔術は・・・天使の、いやそれよりも格は上だな・・・まさか天界の住人が連れてきたとは思ひもしなかったな、会議か何かで私の暗殺命令でも出たのか？なら遺書でも残しておくべきだったな

「はじめまして、だね・・・綾瀬双葉」

空間を割って出てきたのは、優しい顔をした青年だった・・・結構背が高い

・・・その身長はねたましい、私にほしいぐらいだ

「仮にも殺しに来たかもしれない相手にそんなこと思うって・・・  
まあ噂どおりのやつだね」

思考をよむ魔術か・・・さすが天使格、違和感が無くてよまれている  
たとは気づかなかった

む、何だその目は？・・・ああ、私を殺しに来たといっていたな、  
なら遺書くらい書かせてほしいな

「って、どんだけ冷静なんだよっ！」

えーと、こういうときは・・・ナイスツツコミ？

「もういい、突っ込まんぞ、僕はツツコまないぞ（ブツブツ）」

「・・・・・・・・なんか、スマン、しかし私はこういう性格なのだ」

しかしあれだ、ずいぶん人間らしくなったと思っていたが・・・天使なんかには会っては昔のように焦らないな、というか天使というほうが落ち着いてしまう・・・

「つかそういうの考えるのはいいけど、話を聞いてくれ、別に殺しをしに来たわけじゃないから」

む、そうかそうか捕獲してちゃんと天使や悪魔の目の前で殺すのか・  
・はあ・・・残酷なのはできるだけさけてほしいな

「いや、僕の権限で君は死なないようにしてるよ」

「天使や悪魔よりも上の権限・・・ああ、神か」

「何その反応っ!?!? 神様だよ? 天使でもめったにあえない神様だよ  
っ!?!?」

先代の神は私の友人だからな、神なんて唯の飾りということは良く知っている

「なんか傷つく言い方だな」

「しょうがない、ゼウスは全知全能だが基本馬鹿するからな」

というより私の悪魔の性別が無いからといって色々とおかしな（性的な）こともしてきたしな、男の姿のときに『やらないか』といってきた時はさすがに全力殴って一つの世界を破壊してしまうところだった・・・



「えっ、先代ってゼウス様のことっΣ、俺そっち方面の神じゃないし、つかゼウス様馬鹿なのっΣ」

「ああ、馬鹿だ」

断言だな、あいつは超がつくほどの馬鹿だ

「それで、私に何のようなんだ？」

「え、あ、そうそう君にあげるものがあるんだよ」

・  
・  
・  
?  
?

神が私に贈り物？何をだ

「とはいっても物じゃ無いんだけどね、まああげる前に話があるんだよ」

といい自称神の青年が話し出す

「自称じゃないから・・・じゃあ簡単に言うと君は死んだんだよ」

私がいっ死ぬようなことを・・・・・・・・・・把握、魔術つか  
いすぎだな

「そう、君は人間の姿で魔術を使いすぎ・・・まあ人間や天使並みの魔術だったらましなんだけど君のは『例外』だからねえ、人の姿でぼんぽん使えるものじゃないよ」

確かに、まあ私は承知で使ったことだ、死ぬのはしょうがない

「君は天界から追放された身なんだけど・・・なんていうのかなあ、まあコッチの都合で死んじゃいけないんだよ、だからさつき死んだとか言ってたけど死ぬ寸前で『死』の時を止めてコッチに持ってきてたんだよ」

「じゃあ贈り物とは生き返らせることか、しかしそれなら私は魔術を使ってまた死ぬぞ?・・・というよりナゼそんな事をする、私は罪人のはずだ?」

「いや、人間の姿じゃないよ? 『悪魔』として向こうに送るよ、それと罪人は今は関係ないよ」

関係ないとは、神は何を考えているんだかな

・・・世界征服するかもしれないぞ？

「いや、君はしないだろう？」

ああ、面倒くさいからな、第一人を傷つけるのは趣味じゃない

「・・・なんか悪魔らしくないね」

知らん、第一分類が悪魔なだけ、実際は『落ちた身』だから違う

「そうだけど・・・おっと、時間がもう無いからすぐに向こうに送るよ?」

「む、悪魔になっていないかい?」

「ああ、君の悪魔の体は生憎もう無いんだ、だからその姿を元に悪魔にしてあげるよ」

・・・はあ、やっとこの不便な体と分かれる時が来ると思ったのだが、残念だ・・・

「まあまあ、可愛いからいいじゃないか、じゃあもう会うことは無いと思うけどバイバイ」

そう言われながら、私の意識は落ちていった

男が可愛いといわれても喜ぶわけ無いだろ、一応私はほめ言葉として受け取るが・・・

「さてさて・・・ルシア・・・いや、人間からは『堕天使ルシフェル』や『魔王サタン』とかよべれてたか？・・・俺を楽しましてくれよ？ククク」



不気味に笑う『基本馬鹿の神様』は、崩壊していく学園都市の幻想の中に消えていった・・・人間界にとんでもないものを落として

そして壊れていく学園都市は、近い未来の現実かもしれない・・・

## 第二十話 悪魔（デビル）（後書き）

双葉さんは悪魔じゃなくて堕天使だったとはΣ

それと一応堕天使の分類は悪魔とよばれているので悪魔でいいと思います

後本分でもわかるようルシファーはサタンと同一人物（悪魔？）という説もあります [Wiki](#)参照

## 第二十一話 魔王光臨

風が強く吹いている・・・心地よいとはいえないほどの・・・

あまりの強い風と冷気で私はそっと目を開けた

・・・なぜだ、ナゼ目が覚めたら落下中なんだ

目を覚ました私が一番最初に見たのは雲、そして空、あと熱いのが嫌いな私にとって忌々しき太陽・・・

というより早くどうにかしなければな．．．．．まあ落ちて死ぬことは無いはずだが目立つのはさけない

悪魔になったから翼は出せるよな？

バシユウツ！！

という効果音と共に背中が裂けた

私の背中から30cmちよつとの半透明の黒い翼が生えている

・・・翼は基本見せ掛けだからな、実際目に見えない魔力で飛ぶから派手で大きくなくて

としょぼい翼に言い訳をしながらやつと雲の中から出て、地上が見えた

「さて、後は姿でも消して地上に降り・・・・・・・・む」

ずっと下に見えたのは学園都市、そして一部分で妙な力が発生している

天使・・・・・・・・だな

すぐさま私は学園都市に落ちていった

「く、何なのよあれ・・・」

美琴Side

「■■■■■!!!」

私の目の前で、化け物——幻想猛獣（AIMバースト）が叫ぶ

「うっさいわねえ!!!」

と全力で電撃を放ったけど、少しこげた後、まるで何もされなかったみたいに跡形も無く直っていた



ったく、あれは何なのよっ!!

キュイイイイイイ

幻想猛獣の頭上に、圧縮された光の玉が構成された

ッて!! やばっ!!

「『消えろ、自滅しろ』」

・  
・  
・  
・  
・  
ボコボコボコ

へ？

誰かの声が聞こえたと思ったらいきなり光の玉が消え、  
幻想猛獣の体が沸騰したみたいに膨れ上がった

「美琴、ここは私がやる」

後ろから放たれる、数日振りにきいた声は

7月20日に連絡を取れなくなったふたねえの声だった

「天使じゃなくて、なりそこないか・・・」

ようやく視認できるようになって見えたのは頭に天使の輪をつけた  
気味の悪い生物だった

付近にあるA I M拡散力動場を私に集める魔術を発動し、私は『精  
密機械から見ると』能力者になった

一応の保険だな、A I Mは今まで能力で隠していたとでもいって  
こう、そういう力とでもいって

キュイイイイイイイイ

む、誰かと戦っているのか？何かを狙って……美琴だ

あまり私に近い人物に魔術を見せるのは・・・いや、もういい、早くしなければ

「『消えろ、自滅しろ』」

言霊を使い、相手の攻撃を中断させる

「美琴、ここは私がやる」

さて、私の友人を殺そうとしたのだ・・・万死に値するぞ？クク  
ク・・・

美琴  
Side

そこからはふたねえの独壇場だった

レベル5並はある炎、水、ましてや私並みの電撃まで使い相手の再生が間に合わない速度で攻撃の限りを尽くしている

確かに・・・これなら隠していたかもしれない、こんな馬鹿みたいなおかしすぎる力は・・・

こんな力なら、もうそろそろ決着がつくかな？



そんな事を思っていると、急に幻想猛獣の目がよりいっそう赤くなり、体がドス黒く変化し、後ろの翼らしきものもよりいっそう大きくなった

雰囲気でわかる、これはさっきまでと比べられないほど強くなってる

「ふ、ふたねえ、さすがにこれはや……ば……い……?…?」

キュイ

そんな小さな音が鳴ると、視界の多くを埋め尽くしていた幻想猛獣は消えていた

暫くぼけんとしていた、たぶんこのとき大きく口を開けていたと思う

と、先ほどまでふたねえがいる場所を見ると、すでにそこには誰もたってはいなかった

「…………ふたねえ…………何なのよ、さっきのは」

ただただ、私はふたねえがたっていた場所を見るしか行動はできなかった……いやそもそもほかの行動を考える余裕が無かった、圧倒的な、人間がたどりつけないような力を持ったふたねえを見て

・  
・  
・  
・  
・  
訂正  
・  
・  
・  
あれはふたねえなんかじゃない  
・  
・  
・

『化け物』  
だ

第二十一話 魔王光臨（後書き）

ふたね ええええええ！！

これは美琴と絶交フラグなのか！？

気になります。それはまた次のおはなしでええ。(ムッフ

それと今回幻想猛獣の目の赤さが増し、黒くなったのは原作ではないはずで（あったっけ？

この幻想猛獣はA I Mを取り込んでダメージを回復させる、という点を色々と考え、双葉がこのとき魔術で大量A I Mを回りに集めていたためそれに共鳴して強くなった、ということにしています

まあ強くなっても瞬殺でしたね（笑）

第二十一……、五話 ドジッ娘補正（……神がいたずらしたようです）

失敗した……、美琴の前になぜふつうの姿で出たんだ……

前と同じように姿を変えればよかったではないかぁ……

……  
……  
……  
……と、いうより私がそんなミスを犯すはずが  
無い、ということとはだ

魔術的による精神操作か

私に魔術をかけれるのは神くらいしかないはず、あいつめ、さわやかな顔をして意外とやるな・・・

『魔眼発動―範囲―綾瀬双葉の存在情報―魔術的な干渉を探せ』

[illegible][illegible][illegible]

『どじっ娘♪』という魔術が私にかけられている

なぜ音符・・・・・・・・いや、そのまえになんだこのふざけた魔術は  
？そして私は女ではないぞ

とりあえず私にどんな影響があるか・・・私のスターテスでも見よ  
うか・・・

『魔眼発動―綾瀬双葉のスターテス』

7月24日現在――綾瀬双葉（Ayase futaba）性  
別…男

出生20××年―11月07日×曜日午後××時××分

属性…神Ⅱ王(魔王)＞混沌＞天Ⅱ魔＞邪Ⅱ善＞光Ⅱ闇＋5大属性  
(左から強い順番。5大属性はすべて等しい)

筋力(魔術の加護有り)…EX(魔術無しの場合…C)

神力、魔力、妖力、霊力等…EX

備考…魔界、天界とのリンクが断たれているため魔界、天界からの供給は不可。自己生成モードに移行

耐久(魔力耐性、物理耐性、精神耐性等込み)…EX

幸運…EX(補正。思い描くとおりになる、が綾瀬双葉はしない。  
なのでA～B)



備考…天然補正で幸運に気がつかないときがある（笑）

俊敏（魔術の加護有り）…EX（魔術無しの場合…C）

備考…ドジッ娘補正により何も無いところでつまづく。ここぞというときに確立変動

神具、魔具、宝具…EX

備考…神具——下界に顕現不可。魔具——魔力の供給量次第で顕現可能。宝具は可能。

詳細…神具——神をも殺しかねぬ意味の故（ゲルタナ・モルダヌ）  
現状使用不可、原因——どじっ娘補正

詳細…魔具——七ツノ大罪<sup>ななつのたいざい</sup>現状使用可能。大罪プログラム半壊、  
設定初期化を推奨。

詳細…宝具——人間界のものならすべて顕現可能。天界も一部可能。

能力<sup>スキル</sup>

魔眼、邪眼、神眼…EX

淡<sup>あわ</sup>キ漆<sup>くろ</sup>黒<sup>しそ</sup>キ始<sup>しそ</sup>ノ三対（翼を生やすスキル）…ランク無し

威<sup>カリスマ</sup>厳…EX（操作可能）

備考…ドジッ娘補正で時折使えない場合有り（神力、魔力、妖力、  
霊力による言霊は別）

???（存在確認、しかし詳細検索と使用は不可、また同様に10  
0以上のスキル確認可能だが使用は不可の状態）

天然…B

妖美（生物を欲情させるスキル）…B

ドジッ娘補正により『妖美』が『母性本能をくすぐる』スキルに一

時的に変更される

ドジッ娘（時々失敗する（ランクで確立変動）ここぞという時は1／2の確立で失敗、大事なことを深く考えない（ランクで確立変動）  
）..B

備考..なおランダムに系統を絞り、その魔術が使えなくなる。パターンは攻撃系、防御系、支援（加護）系、回復系、空間系、時間系、特殊系の7つから常に1つ使用不可。

.....

.....久しぶりだ、こんなに殺意が沸いたのは（遠い目

まあとりあえず致命的な障害は無いな、それだけでもよかった、それよりも天界に行ってきたから時間がずれてるのが困る。カナミンが結構おもしろかったのに見逃してしまったのが残念だ・・・

武器関係は神具はこの空間に現れただけでも次元を破壊しきらんから使わないし・・・大罪は半分ほど破壊されているのか・・・これはどじっ娘補正ではなくたぶん私の体という入れ物が暫く無かったから自然消失していたんだろう

一番痛いのが系統魔術を一時的にとはいえ使えなくなることだな・・・まあ攻撃系は基本使う予定がないから別にいいが・・・

後で直しておくが・・・『天然』・・・そんなものも追加されているのか（いえ元からです

これは私の魔眼にも検索できないほど（だって元からじゃん）の魔術とは……神め、うらむぞ（これは神は悪くないぞー

それと妖美だ……これも神の性か（いえ、これもまたまた元からです

……これもまた魔術検索に引っかからないほどの魔術とは（だーかーら、元からだってーの

1日……いや、数日かかるかもしれないが必ず直してみせるっ！

## 第二十一……、五話 ドジッ娘補正（……神がいたずらしたようです）

見やすいようにF a t e風にしてみました……ほとんどがEXとかちーつと！

神具、魔具、宝具はおいおい出す予定です（7ツノ大罪はすぐに出ると思う

それと第二十一話で登場『淡キ漆黒キ始ノ三対』（読み方は『あわきくろくしそのさんつい』）は一方通告の翼と同じように攻撃も可能（触れるギリギリになった瞬間バーン

そして双葉さんも<sup>マジカルパワー</sup>超機動少女カナミンを見てるのですw

## 第三十二話 神崎火織（せいじん）

ここをこうして・・・む、また複雑な術式が・・・ならこ  
っちの構成を少し前から改善して・・・むむむ・・・術式変化  
か、内容は数秒ごとに構成を異なるようにする、か・・・じゃあ  
まずはその術式をこわさないとな

私、神曰く魔王の綾瀬双葉だ

あの『どじっ娘補正』を直すためにかれこれ数時間・・・一向に  
解除できる気配が欠片も無い・・・

さらにだ、術式を組み立てるさいに『どじっ娘補正』なるものが働  
いて100%な術式が完成しないで数%は精度が落ちる・・・

正直うざい・・・

「・・・魔力のにおいが・・・」

3, 4 km先から魔力のにおい・・・ああ、においといっても例えだ、比喻表現だ・・・を感じた

しかもゴク最近に似たのを・・・正確には数時間前に似た感じた魔力なのだが・・・



嗚呼、ものすごくいやな予感がする……『検索―魔力源―範囲―……あそこらへん』

「魔力発生源はあの炎の魔術師か……しかし……なんで天使並みの人間がいるんだ、しかも当麻も……」

私はため息をはき、ややあきれながらも座標誤認の魔術を組み立てる

……む、そういえば悪魔の体になっているのならタイムロスは無いに等しいな

そう考え終わるとすでに目の前には見知った顔と、そして神の加護を受けた人であり人を超越した人間が存在していた・・・面倒くさいのに、なぜ私はきてしまったのだろうか

当麻Side

俺の周りから人がいなくなった

ただ夜で人通りが無くなったとか、ここが立ち入り禁止区域とかでもない

本当に『人がいない』空間に、俺は立っていた

「ステイルが人払いの刻印を刻んでいるだけですよ」

たった一瞬。瞬きを一度しただけで彼女は現れた

気づけなかったとか、暗くて見えなかったとかじゃなくて本当に一瞬で目の前に現れた

「……神の加護とは、面倒くさい……」

目の前の脅威であたまがこんがらがっていると、後ろから深いため息が聞こえた

新手か？と思いい視界の端に女を入れながら声の元をさぐる

「ふた、ば？」

4日前の魔術師戦から行方不明だった双葉だった

よかった・・・あの魔術結社とかいうやつに何かされたと思ったぜ・  
・

って、今はそんな事じゃなくさっきの女の――――

「は？」

女がいた位置にはすでに誰もいなかった、確かにちゃんと視界に入  
れて注意していたのに消えていた

『ガッキイイイイイ!!』

今度はほぼ後ろのほうから金属同士がぶつかる音が鳴り響く

双葉だ、双葉がいつの間にか出した剣で女の刀とわたりあっていた

おかしい、女もあんな2mもありそうな刀を振れるのもおかしいが・  
・・・・・なんなんだよあの『馬鹿デカイ』剣は

「あなたは・・・何者ですか・・・?」

「そういうことを聞くときは、自分からだろ？」

そういいながら双葉は全長『10 m以上』もあると思われる剣で女にむかってふりおろす

・・・なんだよ・・・お前は、なんなんだよ双葉

神崎Side

上条当麻という人物と接触した直後、彼の方向から、彼の後ろからただならぬ気配を感じた

超能力者や魔術師じゃなくて……どちらかというと『私』に近き、どこか『遠い』位置にいる感じ……自分で言っているが意味がわかりませんね

でも、そう表現しかできないような何かがあるそこにはいた



「・・・神の加護とは、面倒くさい・・・」

神の加護とは・・・くっ、私のことがばれているのですかっ!？

「ふた、ぼ？」

彼の後ろにいたのは、7，8歳程度の女の子で・・・どうやら上  
条当麻の知り合いらしいですが、何かわけありな感じがありますね・  
・

じつくりと、そしてなるべく早く子供の体を見て武器をもっているかどんな体術を使うかなど見分けようとするが・・・武器はどこにもっていないし、魔術を発動できるような意味合いのあるものも身に着けていない。さらには体全体はこう・・・ぷにぷに？

超能力という可能性も・・・いや、彼女はいつのまにか此処に来ていたということは空間移動か瞬間移動を可能にする肉体強化ですかね

でも、聖人の直感でそれは無いと思える

なぜなら彼女と目が合い、その奥が見えないくらいの深い深い闇を見たから

彼女は魔術師や超能力者じゃない、そして聖人でもない・・・

いや、その『逆』だ

『ガツキイイイイイ！！』

それを理解すると同時に私は彼女に攻撃をしかけてしまった

そして絶望

彼女は私の七天七刀をどこからかとりだした剣で受け止めていた

聖人としての一撃をこめた、最高の一撃をだ

この剣も剣で強度が強いですね・・・それにこの剣はなんでこんなにも太く・・・太く・・・???

視界に移る剣は太さだけで1mはある代物で『剣』とは到底呼べないと思ったが

目をやや上に向けると、その頂点は約10mほど上に存在していた

遠くから見れば見た目としてはれっきとした剣に見えるだろう・・・

「あなたは……何者ですか……？」

「そういうことを聞くときは、自分からだろ？」

そういいながら子供は剣を振るう

早く、速く、疾い

なんとか剣をよけたがそこで不思議なことがおきた

聖人の私ですら反応できない剣は、地面を壊すことなく地面と接していた

ふつうなら陥没はしてもおかしくない一撃なのだが・・・やはり超能力か私の知らない魔術ですか？・・・もう少し見極めたいところですけど今はそれを考える時間が無い・・・

「・・・私は神崎火織・・・いえ、Salvere000（救われぬ者に救いの手を）と名乗りましょう」

ゆっくり、時間をかけて極力考えをまとめる時間を確保する

「じゃあ私は綾瀬双葉ではなく……うむ……聖なる人ではなく、罪を背負うもの……『罪人』とでもいおうか？」

罪人……聖人とは対になる存在ですか

「聖なるものよ、当麻に手を出すのなら貴様を——」

子供は静かに口だけを動かした

『葬るぞ』と……

背中をかける冷や汗と体中をしびれさせる恐怖が私を包む

ですが・・・私はそれでもやらなければ、あのこを・・・

「助けなければいけないのですっ!!」

私は子供の姿をした『罪人』に向かい走る

今まで出したことも無いような力を出し、極限を超えて、限界を超える



『The Seven Deadly Sins Program  
— Sloth —』

子供がそうつぶやくと同時、この戦いは終わった

私の刀、七天七刀と私の両腕を奪って・・・

## 第二十三話 蘇る怠惰（ゆがんだところ）

聖人の腕と刀があまりの衝撃に絶えられなくなり、『消失』した

「あ、ぐ、あああああああああああああ！！」

一瞬、目の前の状況を確認するように聖人は自分の腕を交互に見て、  
そしてわめいた・・・

うるさいくらいに泣き喚く。

心を落ち着かせようとして腕で自分の体を抱こうとするが、肝心の腕が無くてさらにうるさくなる

その時、腕の断面から飛び散る血が私の口元にとび、口に入った

・・・オイシイ

そして懐かしい。

いつか、天使どもと戦った時の味だ

『殺せ。食らえ。喰らい尽くせ』

私の感情が乱れる

血がほしい、肉がほしい、魂がほしいと唸る

「……自分を制御できなくなってきたいるな……」

少し目を瞑り心を落ち着かせる

まったく……戦闘なんて久しぶりだったのもあるが、まさかこんな悲惨な状況になるとは思っても見なかったな

くそう、絶対に『ドジッ娘』というスキルが邪魔したな（いいえ、あなたがふつうにミスしましたよ。主に天然スキルでw

……この際字の文<○の中>はほおっておこう

「すまない、こんなに酷くなるとは思っていなくて・・・今治す」

正直当麻を狙っていたのだがここまでやっては罪悪感なるものがくつくつと・・・

はあ、悪魔になったのはいいが加減がわからんのは辛いな・・・

とため息混じりに魔術を発動して両腕、ついでに消失した刀も復元する

しかし、七ツノ大罪が壊れているというか・・・反抗期になっているな

まあまだ『怠惰』しか使用していないからすべてかどうか知らないが

む、そういえばまだ『怠惰』を顕現していたままだな、そろそろ戻さないと色々とやばいな……この空間が

気がついたら10mもある剣『怠惰』の表面上の空間がビリビリと振動しているように見えたのは気のせいだと思う……

「はあ、……く……あなたは……何者ですか？」

……両腕消失して気絶しないのはさすがといったところか、ふつうの人間ならショック死でもしてそうだが

まあ精神ダメージは相当なものだな、これで当麻には手を出さないだろう

「さっき言ったが『罪人』だ」

とはいっても罪人がいても、この世界で言う罪人の概念は知らないがな

「・・・『罪人』とは？」

というか仮にも敵と思われる存在にそこまで聞くか？

・・・一応答えるが（さすがふたばさん、やつさすうい！

・・・・・・・・最近○の中がウザイ

「そうだな・・・聖人と同じような力だが、所詮神ではなく悪魔の加護だ」

加護というより悪魔だな、私は

「!？・・・・・・・・いえ、天使がいるので悪魔も（ブツブツ」

どうやら天使は一般的（魔術関係で）なことらしいな

ふむ、しかし天使と契約して魔術を使用するのか？



なら絶対に悪魔としたほうが効率的だな、基本悪魔は『契約』云々は律儀だからな

天使・・・というかゼウス？等は結構適当で投げやりで面倒くさがりやだからなあ・・・いいところ無いな、仮にも神なのに・・・

あ、そういえば当麻は何処に行った？

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

ちら、と後ろを見る・・・が特にも無い

ということは

口を大きく開けてみているのは・・・私か？

まあ人間には到底できないことをしているからな・・・

当麻も人のことをいえないが・・・ああ、そういえば

「当麻、その右腕を貸せ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

適当に魔術で炎を出してぶん投げる・・・・割と力入れて

「・・・・・・・・っ！、ぬうおおおおお！??」

とっさに右腕で防御し、炎を打ち消す

やはりそうだな『神殺しの右腕』か・・・

力だけなら私の最下層の魔具と同レベルの力だな・・・

「な、なに飛ばしてんだ！しぬぞっ！」

「お前は死ぬような人間じゃない」

なにせその右腕、現在進行形で『死』を消しているぞ？

はは、当麻が不幸な理由がわかったな

その右腕は異能の力を消すだけじゃなくて

『幸運』や『不幸』をまるごとごとそりと消して

しかも魔眼で確認した限りじゃ『運命』も消して……ああ、だから『死』も消えるわけだ

何度か当麻の後ろに死神を見たことがあるがいつのまにか消えてるのはそのせいか（気がついてるならせめて対処しろよw、友人だろw  
w

……にしても、面倒くさい

右腕もだが、今横でうんうん言っている魔術師も

やはり怠惰を使うとそのあと睡魔と面倒くささに襲われてしまうのがネックだな、能力では一位二位を争えるのに

「当麻、眠い、おぶれ」

してこの体でいいことは簡単におぶってもらえることだな

さて寝ようか

双葉のことをなんだかんだ思っている当麻の背中によって私は静かに瞳を閉じた

さて、今回は面倒な日だったな・



## 第二十三話 蘇る怠惰（ゆがんだころ）（後書き）

今回はなんかいつにもまhしてぐだぐだしていて内容がつかめないですね；（汗）

高校に入り時間が無くてこお言う風になってしまいました・・・このままこの状況が続いてこの小説は止めるかもしれません

もちろん！自分は最後まで書きたいと思いますが、結構中途半端な終わり方になると思います

それでも見てくださるかたがいれば超うれしいですっ^^

で、前回の最後らへんに登場した技『The Seven Deadly Sins Program—Slotch』は日本語訳『七つの大罪プログラム—怠惰』ですね

結局は怠惰という『魔具』の召還詠唱と考えてくれればいいです  
その『魔具』の『怠惰』  
結構チートくさいです

まず始めに、この剣は切るだけじゃ相手にダメージになりません（ただしあくまで『防御』としてなら使える

一秒ごとに本来の力を上乘せするです  
一秒たてば2倍、2秒なら3倍、3なら4といった具合ですね  
で、攻撃したいときに念じればその時に応じた衝撃を対象に与えられます

そして一番強いのが『上限』が無いことです  
衝撃に上限が無いので秒を王ごとに強くなる衝撃です



さらに、同じ対象に（人なら人に）もう一度斬るとその割合が2倍になります

そしてこれも上限無し

単純な攻撃力なら絶対に強いですね（笑）  
そんな武器です

## 第二十四話 今後の問題（なぜこうなったし）（前書き）

すみませんっ！

投稿が遅れてしまいましたっ！！

とはいっても見てくれている人は少ないですけどね（自虐ネタw

高校に入ってから毎日が結構大変でなかなか小説に手を出せない状況・・・

なのでこれからは前よりも遅い更新となりますすみませんっ！！

## 第二十四話 今後の問題（なぜこうなったし）

困ったな。昨日は面倒くさくて考えもしなかったが

あの魔術師『聖人』といていたはずだよな？

あんな力を持った人間早々いないはずだし天使や神の『加護』もちだから・・・

結構敬まわれるような存在で怪我とかさせてはいけなかったのではないのか？

たぶんだが、魔術師というのは一般的ではないはずだ

魔術というのは基本的に宗教関係で力を得るはずだから団体組織があるはずで

で、複数ある組織の中に『聖人』が所属している組織があると

聖人を殺す勢いで攻撃（まあ殺す気は無かったが）

←

結果、死にはしないが重傷

←

気まずいので一応治した

というのが大体の流れだが、このことを知った組織は・・・

・・・明らかに私を狙うよな

次に『神殺しの右腕』

ぶっちゃけいうとアレ、私の神具の『神をも殺しかねぬ意味の故』  
と同じ効果だ

ゲルタナ・モルダヌ

まあレベルが低いからそこまでは脅威ではないが・・・

一応『神の上に立てる力』だからな

あ、そういえば不幸や幸運もごっそり消しているはずなのに不幸と  
思っている当麻はたぶん先入観とかそこらへんで不幸とか思ってい  
るんだろうな

で、次に

七ツノ大罪も問題だな

あいつらは反抗期だな

力の制御をやろうとおもっても邪魔をしおって

本当に初期化してやろうかと思うくらいだな

実際その性で聖人の腕と刀を消してしまったからな（いいえ、それ

はあんたの天然で加減を間違えたからです

地の文は無視しようか・・・

最後にだ

「なぜこうなってしまったんだ・・・」

今現在銃弾の弾幕を浴びている

とはいっても私の皮膚の表面上をほかの空間につなげているから直撃しないが

相手からしてみれば吸収してるんじゃないかと思われるかもしれないが、反射じゃないだけまじだろう

にしても、そろそろ面倒くさいぞ

かれこれ10分はこういう状況ではないか？

しかしだ、黒いスーツに身を纏い最新の銃器をもっている姿はドウ見ても魔術師とかじゃなくて学園都市だろ

私はいつ学園都市にけんかを売るようなマネをしたのだ

とはいっても学園都市ひとつじゃ私を倒すことはできないぞ



というかこの世界でも天界でも私を倒せるような存在は早々いないぞ

魔王とか言われてるが位は神並みだからな

・・・そんな話は置いといて

「『邪魔だ、動くな』」

私が言葉を紡ぐだけで銃撃がピタッと一瞬でとまる

黒ずくめの集団は引き金を引こうとしても引けないのでさぞ驚いてるな

「『なぜ私を狙う、吐け』」

適当に黒づくめの一人の前に立ち私がそういうとしやべりはじめた

私が狙われた理由、それは危険分子なるものだそうだ

あいつらには詳細を教えていなかったことを考えると優先順位とか低いようだな、それともできればいないほうがいいという存在か

さて・・・学園都市から狙われ、魔術師からも狙われるかもしれない今の状況・・・これはもう此処にはいられないな

とはいっても私が学園都市以外にいてしまい学園都市側がそれでも私を執拗に追いかけた場合周りにも被害が出てしまうかもしれない

さらに言う学園都市内部では魔術師は少ないはず、というより科学の町だ、基本的にはいないはずだし入るのにも結構な手間がいる

まあ魔術をつかえばどうにでもなるだろうが今、何処にいるべきかというやはり『学園都市』だろうな

だがなあ……一体何処に隠れば……いや、隠れるとかいう考えは良そうか、学園都市のことだ魔術を使ってもバレそうな気がする

「じゃあ私が何処に隠れ————」

——ればいいのだろうか？さらにいうとその後のため息でも突こうと思った瞬間頭に衝撃が襲った

小さい体で踏ん張りもきかず中に浮いたと思うとすぐ横の路地裏の壁に当たった

むう、考えにふけてしまったな……さっきの追っ手の反撃か？

しかし私は起き上がることもせずに横になったまま動かずにいた

ちなみにどんな視点からみても私は死んでいる、という幻を用いた魔術を発動中だ

さてさて、私を殺そうとした犯人は誰だろうな？

??? Side

上からの命令が来たとき、俺は非常に迷った

暗殺命令、そう書かれた資料にあったのはまだ小学生という感じの子供だった

一応ほかの情報を見ると昔の実験体としての薬の影響で見た目が小学生だけでふつうの高校生らしいのだが・・・

毎回こういった命令だ

相手が何をして誰に反感を買うようなことをしたのかわからないのに、殺すのだ

最初こそ抵抗はあったが今ではそんな事は無い・・・・・・・・今まで  
そう思ってきたが今回でわかった

そんな事は無い、俺はこんな子供を殺すことに抵抗があった

自分に子供がいるとかそんな理由ではない、今までも中学生くらい  
なら殺したこともあった

その時はためらいも無かったが今回は異様に抵抗があった

・・・・いや、これは違うのかもしれない

俺があの子供に思っているのは同情とかじゃなくて・・・恐怖かもしれない

無理にそう思った

そうだ、相手は恐怖、だから飲み込まれる前に殺そう、そうしよう

さらに思った

そうして俺は指をかけていた引き金を引いた

するとドウだろうか、子供にあっけなくあたり横に倒れた



十数分前の報告によると子供は銃弾を吸収した、という報告があったのだが

やばい、もしかして目的の子供じゃなくてただ似ていただけの子供？

いや、でもこんな時間に子供が出歩くのは無いはず？

でも、もしかして――――

不安に思えて俺はその場――――建物の屋上をすぐに降りて子供のところに走っていった

・・・俺が暗部に入った理由はここの闇をしったからとか、そういうふうに仕立て上げられたとかじゃない

俺は昔教師をしていて、そこで不慮の事故で生徒を殺してしまった

それで表社会からは迫害され、自然に裏へと向かっていった、こうするしかなかった

その不慮の事故も俺の失敗から発生した問題だったんだ、だから今、そんな状況と重なってしまったのだ

闇の染まった路地裏を俺は駆ける

そしてたどり着いた瞬間俺は凍りついた

確かにこの子供は資料にのっていたのと同じ顔で、さっき打たれて頭から血が流れている

が、なぜ『笑っているのだ?』

薄く、微笑んでいるように思える子供の表情が俺に恐怖を与えた

死んでいるかどうか確認を、いや頭をねらったんだから死んでるか  
ら後処理はほかの部隊に任せて速くもど————

「『とまれ』」

子供に背を向け走ろうとおもった瞬間、声が聞こえた

今この場にいるのは俺と子供

俺は声を出していないし今みたいな高い声も出ない

じゃあ誰が？

「私を殺そうとは、いい度胸だな」

少し面倒くさそうに言ったのは怪我なんてしていない子供そのもの  
だった・・・

その夜、男の悲鳴が聞こえたとかさ

## 第二十五話 転生者（トリッパー）（前書き）

こちらへんから双葉は本編から離れていく予定・・・ですね。  
暫くは転生者編が続いて、基本はレールガン絡みですよ。

## 第二十五話 転生者（トリッパー）

??? Side

「う．．．．。」

学園都市のどこかで高校生くらいの少年は目を覚ました

周りの景色は見たことも無いはずなのに、少年はやけに冷静で周りの状況、自分は今何処にいるかを予想を立てていた

そして暫くあたりを見渡すと口を三日月のように歪ませて笑った

「クク、ここが『禁書目録の世界』か」

少年は歪んだ口で、声でそういった

双葉Side

いやな感覚があった



強大な魔術の力が発生したときの感覚だ

「これは、天使クラスの――」

だがギリギリ人間の枠を超えていないのを感じると人間クラスの魔術の可能性がある

「ふむ……まあ聖人などの仕返しではないことを祈ろう」

そう言いながら私は学園都市のどこかへ身を潜めた

## 少年Side

さて、まずやることは『原作キャラ』である美琴、インデックスらへんにと関わるところからだな

ひやはは、転生のとき天使は原作開始前からは無理だったーけど『フラグ体質（恋愛のみ）』と容姿をかなりよくしてもらったからいいか

それに始めから原作キャラには好まれやすいよう細工してもらってるし

・・・お、あそこあるいてる花畑はもしかして・・・まあ花畑とかほかにいないだろうけど・・・

初春Side

うゝゝゝゝん

昨日の双葉さんの一件で白井さんは大忙しです

で、それで私を使って情報収集するのはいいんですけどもっと優しくあつかってくれないかね

でも私も興味はありますからね・・・何せ実現不能といわれた『デュアルスキル 多重能力』ですから

確かに昔に『かなりの演算能力』をもってるとは聞きましたけど、本当に双葉さんのは『多重能力』なんでしょうか？

私がうんうん悩んでいた時、通りかかった路地裏で罵声が聞こえた

よく見てみれば奥のほうで制服をきた学生とスキルアウトらしき集団が一体多数で向かい合っていた

私はとっさに走っていった

普段なら白井さんに連絡を入れるところなんですけど

このときは木山先生のときのよう力に劣等感を覚えていたので私でもできると証明したかったから・・・

よく考えれば馬鹿なことってわかってるのに・・・はあ、私って馬鹿ですねえ・・・

「ジャッジメント風紀委員です！抵抗せずにおとなしくしなさいっ！！」

「」「」あゝあ？！」「」

ひゃわっ？！

「おいおいおい、こんなガキの風紀委員・・・お前らやれえ！」

「うひゃ、み、みんな能力使えるなんてひきよ————」

スキルアウトが襲い掛かろうとしたとき、風が私の頬を撫でた

「大丈夫か？」

いつのまにかスキルアウトはまとまって地面に伏せて気絶し、中心に少年がたっていた

か、かっこいい・・・私じゃなくても絶対にそう思ったはずですよ！

少年Side

「大丈夫か？」

まさかスキルアウトに突っ込んでいくとは・・・こんなこと原作じゃかかれてなかったけど・・・もしかしてほかにも、いや、初春はジャッジメントだからこういうことは日常茶飯事。小説でかかれなくても普通か？

「ありがとうございますっ！」



「ん、別に礼を言われるためにやったわけじゃねえし・・・まあ怪我が無くてよかったな（ニコ）」

「え、あ、はいい・・・／／／／／」

リアルニコポk t k r w w w w w

さてと、もうちょっと原作キャラと関わりたいのはあるんだが・・・生活面をどうにかしないといけないし今日はコンだけだな

アレイスターにわかるようになってからは暗部とかにはいりやいか、まあ能力はムーブポイント並みの『空間転移』テレポートだからえーと、なんだっけあわしま？むすじま？・・・まあそんな奴のイザという時の代用としてくれるだろ

「じゃ、俺は用事あるからこれで『ガシッ!』・・・what?」

「確かに助けてもらってますけど・・・生徒が無断でこおいうすることはダメなんで♪」

あ、なんか黒子とかが美琴にいつてたなそんなこと

やえ、どうするか、結構時間とかかかるのは嫌だし・・・あ、いいこと思いついた

「すまん、いまとーても大事な用があつてな。ほれ、これ俺の番号だから明日以降に連絡してくれ、事情徴収とかならいつでもやってやるよ」

そういつて俺はメモ帳の一部分に携帯番号とメルアドを書いてちぎり、初春に渡した

うし、これで接点もできたし一石二鳥じゃねー、と思いながら俺は適当に転移した

## 第二十六話 新章（リ：ニュー）

蘇芳千里  
すおうちやと

LEVEL 4の転移系能力者

その他詳細不明

「・・・・・・・・うーん」

あの人の中学以前のことがあったくわからない・・・もしかして中学とか行っていないんですかね？

いや、でもそれだったら能力は発動されないし……でも原石  
っていう可能性もありますし

かれこれ小一時間程度悩んでいるがいつこうに答えはわからないと  
あきらめて私はパソコンをにらんだ

「わからないなら探せばいいっ！今はジャッジメントは暇タイムで  
すしっ！！」

わー！！とキーボードをかたかたししようと思った瞬間、目の前が  
真っ黒に……いや、うす黄緑に？

「へぶっ！？」

「ジャッジメントに暇タイムなんてありませんわよー（ズズー）……

・あら、おいしいですわね、このお茶（ズズー）」

「ほのぼのお茶をすすりながらソファに転移させなんでしょう、白井さんキチクにもほどがありますっ！」

「今度は外に転移させますわよー（ズズー）」

白井さんはわらってるけど目はマジだった

こわっ！？目が、目が~~~~！？ってか手を翳さないでくださいっ！！

・・・あ、そういえば白井さんならほかの転移系能力者知ってるかもしれないですねっ！

「白井さん白井さん、この人知ってますか？」

といいつつソファから立ち上がりながらパソコンの画面を指差す

「んー、えーと何々。蘇芳千里？・・・転移『系』能力者とはありますが、聞いたことも無いですわね」

「白井さんでも知らないんですか？・・・つかえませんか？」

あ、本音が――――

「つて痛いですいたいです、無言でアイアンクローは止めてくださ  
いっ！！！！」

）数分後（少年との出会いを説明中）  
（



「・・・で、その学生のことを知りたいというわけですね（一目ぼれですわね）」

「はい（これがいわゆる一目ぼれですかねえ・・・？）」

「連絡先を聞いているなら、それにかければいいんじゃないのですの？」

「あ。」

忘れてたっ！！確かポケットに入れてたような気がっ！！

あれ、なんかボロボロのクズしか出てきませんか？

「紙とか入れたまんま洗濯とかしたらそうなりますわよね（笑）」

はっ！！、昨日こけてスカートが汚れて洗濯したんだっ！！

こ、こんなオチって・・・うう

白井さん・・・横で自業自得ですのー、とか言わないで、わかってますから（泣

「まあ・・・私のこの殿方には興味がありますの・・・」

「え、まさか白井さんが美琴さん以外に興味——『ビュン』——  
—フベツ!？」

ま、また転移を……

「そういう意味ではありませんのっ! ……興味とは、これですの・  
・」

410

と転移先のソファの上から白井さんが指す部分を見て……うん、  
見えない

元座っていたイスに座るとさっき白井さんが指差したところを見て  
みる

「えーと『11次元演算をもとにした3次元の演算に活用、応用した転移』……………?」

すなわち転移を11次元演算をしなくても転移ができるわけですので、と白井さんが説明してくれた

……11次元演算を3次元に置き換えるって言うことですよ?

え、でもそもそも11次元演算って……………?

「簡単に言ってしまうと、『パイロキネシス エレクトロマスター発火能力者が電撃使いの演算方法で能力を使用する』能力者という意味だとおもいわすわ……正直信じられませんの」

「……！！っていうことは、ほかの演算方法を使って、まったく別の演算方法を組み立てるんですね？」

「なんだかわかつちゃったような気がしますね、遠まわしに言うと『デュアルスキル多重能力』とかにつながりそうですね……」

「わかったとおもいますがコレを用いれば転移系以外でもほかの能力を使用できますの……でも単純にほかの演算方法を使ってもそれ以外の演算方法を使うのは発動しませんから……演算と演算を組み合わせたりにしてるんでしょうね」

「それって『水を操る能力』と『風や空気を操る能力』をかけて『氷を作り操る能力』になるみたいなことですか？」

「なんかゲームとかでそおいうのがあったので代用してみましたけど、だいたいそんなものでしょうか？」

「ええ、たぶんそうですね。ですけどそれは人間の演算能力を超えてしまうような……まあそれが原因で捕獲された人はいますけど……」

「……それが原因で捕獲？……ああそういえば、双葉さんはかなりすごい演算能力で研究者につかまったとかいってましたね、なら案外と『多重能力』<sup>デュアルスキル</sup>って結構いるんですね（笑）

「笑い事じゃありませんのよっ！」

「わっ、そ、そんな大きな声出したらビックリするじゃないですか」

「……すみませんですの……つい。」

「??:」

そう言いながら白井さんは落ち込んだようすで支部から出て行きました

・・・どうかしたんでしょうか？

## 黒子Side

「1次元を3次元で可能にする。．．．学者に言ったら理論がどうたらとかで馬鹿に思われますわね」

それでも、可能にしている人物がいましたが．．．

「それに．．．もしも蘇芳千里という人物が『あの多重能力者』なら．．．」

昨日、お姉さまが口ずさんでいた『多重能力者』という単語



いつも私の知らないところで何をやっているかは知りませんが・・・  
あんなに『表』に出ていたことは初めてですの・・・

それ以外には『化け物』とか『悪魔』とか言いながら・・・震えて  
ましたの

たぶん、全体の姿だけなら黒子は「おっもちかえりですのお！」と  
か叫んでいたかもしれませんが、あの顔を見ると半端なくヤバイで  
すわ

「・・・蘇芳千里。監視する必要がありますわね」

できれば、『あの多重能力者』ではないことを祈ってますの・・・  
お姉さまでさえ震え上がるほどの、化け物ではないことを・・・



## 第二十六話 新章（リ：ニュー）（後書き）

本文であった『11次元演算をもとにした3次元の演算に活用、応用した転移』というのは研究者から見た視点であり、実際は違うという設定です

11次元を3次元にたとえるなんて不可能ですしね（笑）

この転生者の概念は『最強オリ主ハーレム野郎（しかも自分が利益になることしかないやつ）』という設定なんでその『最強』部分を強調するためにわかりにくい能力にしています

作者もよくわからないんで矛盾とかしてても気にしないで下さいww

## 第二十七話 歪み出す原作（前書き）

転生者では基本レールガン絡みといいながら今回はインデックス W  
W

でもインデックスの首輪破壊とかはさすがに描写しないのもあれな  
んで・・・あと転生者はハーレムにしたいという考えなので神崎に  
恩を売るときたいというのがありますので必要不可欠なのですー

## 第二十七話 歪み出す原作

当麻Side

見た目小学生、身体能力はそれ以下、でも頭は学園都市の学者でもビツクリ

7月20日。

それ以来印象が変わった。てか加わった？

突然出てきた魔術師とかいうやつ、その前に立って交戦していた

そんなかで一番驚いたのが・・・

俺はそつと視線を下に向けて、自分の右腕を見る

『幻想殺し（イマジンブレイカー）』

結構たいそうな名前に聞こえるが実際のところ、本当に『異能の力』  
だけしか消せないのも不良との喧嘩とかには全く持って無意味だし  
念動力とかで飛ばした物体は消せない

で、俺はそのときに飛ばされた

別に飛行機に乗っただとか、ドツか知らない国に強制的にいかされ  
たわけじゃないぞ？

空間と空間を飛んだっつーのか？えーと、そうそう空間テレポート転移っていう『異能の力』だ

それを俺にやった人物、それが――――

綾瀬双葉。

家族構成は父、母、兄で親戚とは理由は知らないが親が縁を切ったらしい

学園都市に来て中学までは研究施設の実験体モルモット

その性で体の成長が止まったとか言ってたな

で、4日間行方不明になったと思ったら俺のピンチに参上して・・・

圧倒的な暴力でことを鎮めた・・・

実際助かったとは思ってる、けど俺が言いたいのはそんな事じゃない  
くて双葉があんな力をもってたこと

この、幻想殺しでも消せない・・・力をもってること・・・



## 千里Side

今、俺は特に行く場所も無くさまよってる

確か今日は両作品もイベントはなかったし、まあ原作に出る奴はいっぱいいるし会うかもしれないよな

ん、お、おお・・・あのツンツン頭の少年は・・・・・・？？ツンツン頭の少年？？？

・・・あーるうえー？

今日は7月26日であって、上条さんは神崎にふるぼっこされておねんね状態じゃ??

と、いうことは原作と違う?

・・・・・・・・・・・・・・・・俺が介入したのは昨日だからどうあがいたって24日に起きたおことは避けられない

425

じゃあ・・・俺が昨日原作メンバーと接触して上条さんが目を覚ます時間が早まった

それ以外は・・・考えたくはねえが『ほかの転生者』トリップバーだな

でも転生時に天使が「転生者を送る世界はすでに平行世界として成立しているので、ほかの手によっての介入は転生者には不可能」といわれてるからな・・・

つつーと自然に答えは前者になるわけだが、つい昨日の初春と関係したことは思えない

それに、抑止力とか修正力とかで原作はそんなくらいじゃ変わらないとか言ってたし・・・

「まあ、いいか・・・・・・・・どうせ俺の力はチートだし」

それにたったいまやることが出来た、今ならちょうど好都合じゃん

「さあてと、上条さん・・・完全なハーレムのために鬼ごっこでもしようかあ」

ククク・・・フヒヤヒヤヒヤヒヤ!!

## 第二十七話 歪み出す原作（後書き）

転生者は冷静な時が多いけど、テンションあがると時々狂います

## 第二十八話 死

千里Side

えーと、まず俺が『パイロキネシス発火能力者』と『仮定』して・・・完成

さーてさてさて、上条さあーん

鬼ごっこの始まりだぜえー

・・・まあ、俺は触りはしないけどな

当麻Side

ああ、夏休みにまで学校に補修とか・・・はあ

インデックスみたいに完全記憶能力とかあったら勉強とか楽なんだろうな

・・・あ、でも厄介ごとに巻き込まれるか？

なら、まだ補修のほうが楽だな～

と、俺はそう思いながら大きなアクビをした

「上条さあ～ん」

無理に出したような猫なで声で呼ばれた



けどその声には気持ち悪いくらいの、背筋が凍るくらいの悪寒が・  
って、ん、炎っ！！？？

目の前で俺に向かってくる炎の塊に手を翳す

パシユウ、という音と共に炎は消えて、炎で隠れていた視界から俺  
と同じくらいの男が出てきた

「やっぱこんなじゃ殺せないか」

く、こいつもしかしてこの前の神父の仲間っ！？

やべえ、アン時は双葉がいたからどうにかなったけど・・・今回は逃げたほうが・・・

俺はまずは右足から少し方向を変えて、逃げる体性に変えていく

「おっとー、逃げるとかまじないぜ」

いつの間にか目の前に男がいた

「おわっ!?!」

つかさっきの炎とかで警備員とかこねえのかよっ!!くるなら早くこいっ!!--!!

「逃げるとか助けを待つか止めといたほうがいいぜ、つか、『人払い』してっから意味ねえけど」

男の言葉であたりを見渡すと、すでにこの空間に人なんて存在していなかった

『人払い』つつーのは・・・この前の長身の刀ポニテのやつがいてた・・・どうりでひとがいねえわけだ

「・・・・インデックスはわたさねえぞ!!」

「そんなこと今はかんけいねえよ、俺は上条さんにようがあるつつーの」

「俺に・・・だど？」

もしかしてインデックスかくまって標的が俺にかわったとか！？

「個人的にハーレム作りたいんで殺しますわ♪」

・・・・・・・・・は？

個人的にハーレムを・・・？？？？

・・・・・・・・・それ、俺関係ある？

ハーレム作る!!上条さん邪魔↓じゃあ殺そうぜ的な?

「意味わかんねえ!!何で俺なんだよっ!俺よりかっこいいやつとかほかに山ほどいるだろ!!」

「そういういみじゃなくてよく、こういう意味だっの!!」

と、男は叫びながら炎の玉を俺めがけて飛ばしてくる

これは先ほど同様消したが、まだゴウゴウとか燃える音がしてるよ  
うな???

「.....ッ!!」

後ろ、真後ろの死角に炎の玉が迫っていた

ふう・・・運がよかったぜ、普段不幸なのに・・・

「それだよそれ、なんだよ、主人公補正とかで死にくくなってるのかね」

しゅじんこうほせいってなんだよ？

って、今はそんなこと考えなくて・・・マジでやらねえと死ぬぞ・  
・

そう思い俺は再び動きやすい構えを取って男にキツと視線を送る

「おいおい、そんな熱い視線おくってんじゃねえよ、なんだ？俺のハーレムに入りたいのかい？」

「……いちいちうるせえ奴だな。」

今のままじゃ調子が狂っちまう……だからちょっと挑発してどうにかなるか？

「……………ヒヤヒヤ、うるせえやつう？……………あ  
あ”何言ってんだよ！！」

瞬間、目の前が真っ白になった





あ  
あ  
・  
・  
もう  
・  
・  
・  
・  
意識  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
が

『The Seven Deadly Sins Program』  
— Greed —

誰かの声が聞こえた

遠のく意識の中、あまりの暑さで耳がいかれたのかって考えたけど、俺にはその声をはっきりと聞こえた

「クヒヤヒヤヒヤ・・・プギャ!？」

熱さが急激に引いていく、けど俺の体温はいまだ高いままで熱がデタときみたいにふらつく

「く・・・う・・・ッ!」

しかも回りはカラッカラした空気で目を開けると激痛が走った

『もう大丈夫だ』

安心。

俺の心はソレに包まれて意識を落とした・・・

千里Side

「クヒヤヒヤヒヤ」

上条さんが苦しんでる、フラグ建築師さんが苦しんでる、

悶え、苦しめ、死んでしまえ、ヒヤハハハハハ

これで完全なハーレムに一步近づいた・・・と、ハイテンションがあがっていると不意に近くから新たな気配が出てきた

あ？人払いをスルーできるつつうのは魔術師とか――――

「・・・プギヤ!？」

痛い痛い痛い、いってええええええ!!

俺の、俺の腕がああああ!!!!

クソ、くそくそくそくそ、誰だこんなことやりやがるやつはあああ

!!

『もう大丈夫だ』

小さく、しかし力強い声がこの空間に響いた

ヤバイ。本能的にそう思う

上条当麻の前にしゃがんでいるあの男から発せられる殺気で俺はしりもちをつく

「な、なんだよお前・・・原作なんかにお、おまえなんか!!」

「原作？・・・何を意味をわからないことを・・・」

原作をしらねって・・・

「じゃあ、お前は誰なんだよっ！」

心でつぶやいたと思ったが、つい叫んでしまう

「私か・・・ふむ・・・『罪人』だ」

『罪人』はそう言いながら俺に向けて右腕に持つ小刀を俺に振り下ろした





## 第二十八話 死（後書き）

なんか隠れてたはずの双葉さんじょーう！！

しかし今回は『人払い』というイレギュラーがあるわけですが、これは本体ではないのだっ！そしていつもの小学生みたいな見た目でもないのだっ！

ちなみに前に登場した美琴の超電磁砲を飛ばした姿です

余談？

発火系能力者が上条さんにダメージ与えられた理由

『プラズマ化しそうなほどの超高熱火炎球をつくり周りの空間の温度を急上昇したから』です

普通そうしたら即死でしょうが一応『幻想殺し』で温度が急激に上がるのは拒絶した、という設定にしています！

簡単に言うとうご都合主義というやつです（笑）！

## 中止

すみません

作者の勉強、部活・ではないですけどっぱいのを二つほどして  
いて、すばらいぐらい忙しいです

なので駄文なこの小説を暫く投稿中止をいたします、真に申し訳  
ございませんm(\_\_\_\_\_)m

ほかの作品についても投稿中止です

高校入学前は大丈夫だろうと思ってはいたし、こつこつを書いてい  
けばいいと思っていましたが・・・そんな暇すらもなくとうとう予  
備の物語も投稿しつくという・・・

完結は絶対にすると思っていた作者のかつてなまでのまがままを許  
してくださいまし

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3340p/>

---

とある悪魔の天界追放

2011年10月7日23時58分発行